

仙台市文化財調査報告書第382集

富沢遺跡

第145次発掘調査報告書

2011年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第382集

富沢遺跡

第145次発掘調査報告書

2011年3月

仙台市教育委員会

序 文

仙台市の文化財保護行政に対しまして、日頃からご理解、ご協力を賜り感謝申し上げます。

富沢遺跡は、仙台市東南部の太白区富沢、長町南、泉崎に広がる面積約90haにおよぶ遺跡です。この地域では昭和50年代の土地区画整理事業やその後の仙台市営地下鉄南北線の開通によって、仙台市南部の拠点となる地域として急速に開発・都市化が進行しています。こうした動きの中で数多くの調査が行われ、旧石器時代から近代にかけて、連綿と人間の生活の痕跡が残されていることが明らかになってまいりました。特に弥生時代から江戸時代までの水田跡の解明や、それよりさらに古い縄文時代、旧石器時代の人間生活の痕跡の発見などといった大きな成果が得られております。なかでも、第30次調査の旧石器時代の調査成果は、遺跡の保存、現地での展示・公開する「地底の森ミュージアム - 富沢遺跡保存館 - 」の建設へと当初の計画の変更がはかられました。平成8年11月に開館した保存館は、当時の自然環境と人々の生活をよみがえらせる展示と、様々な普及活動を通して、広く市民の皆様にご利用いただいているところです。

富沢遺跡では、昨年度まで140次を越える発掘調査が実施されました。今回の報告書は、「(仮称)仙台市南部発達相談支援センター」の建設に伴い行われた第145次発掘調査の成果についてまとめたものです。

先人たちの残した文化遺産を保護し、活用しながら永く後世に伝えていくことは、これから「まちづくり」に欠かせない大切なことです。そのためにも当教育委員会では、発掘調査状況の公開・活用を進めるため、調査概要を紹介する広報板の掲示や遺跡見学会の開催など、今後もより多くの市民の皆様に注目いただけるような活動を行っていきたいと考えております。ここに報告する調査成果が、地域の歴史を解き明かしていくための資料として多くの方々に活用され、文化財に対するご理解と保護の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査および調査報告書の刊行にあたり、多くの方々のご協力、ご助言をいただきましたことを深く感謝申し上げ、刊行の序といたします。

平成23年3月

仙台市教育委員会

教育長 青沼一民

例 言

1. 本書は、「(仮称)仙台市南部発達相談支援センター」の建設に伴う富沢遺跡第145次調査の報告書である。
2. 発掘調査は、仙台市教育委員会の委託を受け、株式会社ノガミが行った。
3. 本書の作成・編集は、仙台市教育委員会生涯学習部文化財課 工藤信一郎・水野一夫の監理のもと、株式会社ノガミ 石垣義則が担当した。本書の執筆分担は、以下のとおりである。

工藤信一郎 第1章第3節

石垣義則 第1章第1節・2節、第2～5章

4. 整理作業・報告書作成は、株式会社ノガミ龟田営業所にて行った。
5. 野外調査と報告書作成にあたり、下記の方と機関より協力を賜った。記して感謝の意を表します(順不同・敬称略)。
松本秀明(東北学院大学地域構想学科) 健康福祉局健康福祉部障害者支援課 仙台市富沢遺跡保存館
6. 本調査に関わる一切の資料は仙台市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 本報告書の土色については、「新版標準土色帖(2002年版)」(小山・竹原:2002)に準拠している。
 2. 採図で使用した地形図の原図については、各採図に記している。
 3. 本文・採図で使用した方位は全て座標北で統一している。
 4. 図中の座標値は、日本測地系の平面直角座標系(X系)に準拠している。
 5. 標高値は、東京湾平均海面高度(T.P.)を示している。
 6. 採図の縮尺は、平面図:1/200、断面図:1/40を基本としたが、スケール付近にその都度示した。
 7. 採図で使用したスクリーントーン等の凡例は、その都度注釈を加えた。
 8. 本文中の「擬似畦畔A」は水田の畦畔直上に認められる自然堆積層上面の高まりを、また「擬似畦畔B」は水田の畦畔直下に認められる自然堆積層上面の高まりを示している(斎野:1987)。
 9. 本文中の灰白色火山灰は、これまでの仙台市域の調査報告や東北中北部の研究から、「十和田a火山灰(To-a)」と考えられている。降下年代は現在、西暦915年と推定されており、本書もこれに従う。
- 山田一郎・庄子貞雄 1980 「宮城県に分布する灰白色火山灰について」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1979』
仙台市教育委員会 2000 『沼向遺跡第1～3次発掘調査』仙台市文化財調査報告書241集
小口雅史 2003 「古代北東北の広域テフラをめぐる諸問題—十和田aと白頭山(長白山)を中心に」『日本律令制の展開』吉川弘文館

〈本文目次〉

序文

例言・凡例

第1章 はじめ		
第1節 富沢遺跡の概要	1	
第2節 調査要項	4	
第3節 調査に至る経緯	4	
第2章 調査方法と調査経過		
第1節 調査方法	5	
第2節 調査経過	5	
第3章 基本層序	7	
第4章 調査の概要		
第1節 3層上面	15	
第2節 5層上面	16	
第3節 6層上面	16	
第4節 7層上面	16	
第5節 9層上面	17	
第6節 12層上面	18	
第7節 13層上面	20	
第8節 繩文時代の調査	21	
第9節 旧石器時代の調査	21	
第5章 総括		
第1節 水田跡の調査成果		
1. 周辺調査区との層序対応関係	22	
2. 平安時代の水田跡について	23	
第2節 旧石器時代の腐植土層の分布について		26
引用参考文献		

〈挿図目次〉

第1図 名取川下流域の微地形分類図	2	
第2図 富沢遺跡と周辺の遺跡	3	
第3図 富沢遺跡第145次調査区位置図	6	
第4図 調査区配置図	6	
第5図 調査区位置図	6	
第6図 基本層序断面図	11	
第7図 調査区北壁断面図	12	
第8図 調査区東壁・南壁・西壁・北西壁断面図	13	
第9図 3層上面平面図・SD1断面図	15	
第10図 5層水田跡平面図	17	
第11図 6層水田跡平面図	17	
第12図 7層水田跡平面図	17	
第13図 5～7層畦畔断面図	17	
第14図 9層水田跡平面図	18	
第15図 9層畦畔断面図	18	
第16図 12層水田跡平面図	19	
第17図 13層水田跡平面図	19	
第18図 12・13層畦畔断面図	19	
第19図 40層上面平面図	21	
第20図 41層上面平面図	21	
第21図 旧石器時代の調査範囲	21	
第22図 設定地区と調査区位置図	22	
第23図 5層水田跡と近隣の調査区の状況	24	
第24図 12層（北部A地区基本土層11層）水田跡と周辺の弥生時代中期中葉の水田跡	25	
第25図 旧石器時代の腐植土層の分布図	26	
第26図 第145次調査区と近隣調査区の基本層序	27	

〈表目次〉

第1表 基本層の土層注記	10
第2表 畦畔計測表	20
第3表 各調査区における旧石器時代の腐植土層	
	28

〈写真図版目次〉

写真図版1 基本層序	32
写真図版2 基本層序、12層水田跡	33
写真図版3 SD1、5層・6層水田跡	34
写真図版4 7層・9層・12層・13層水田跡、8層上面	35
写真図版5 14層上面、縄文・旧石器時代相当層	36

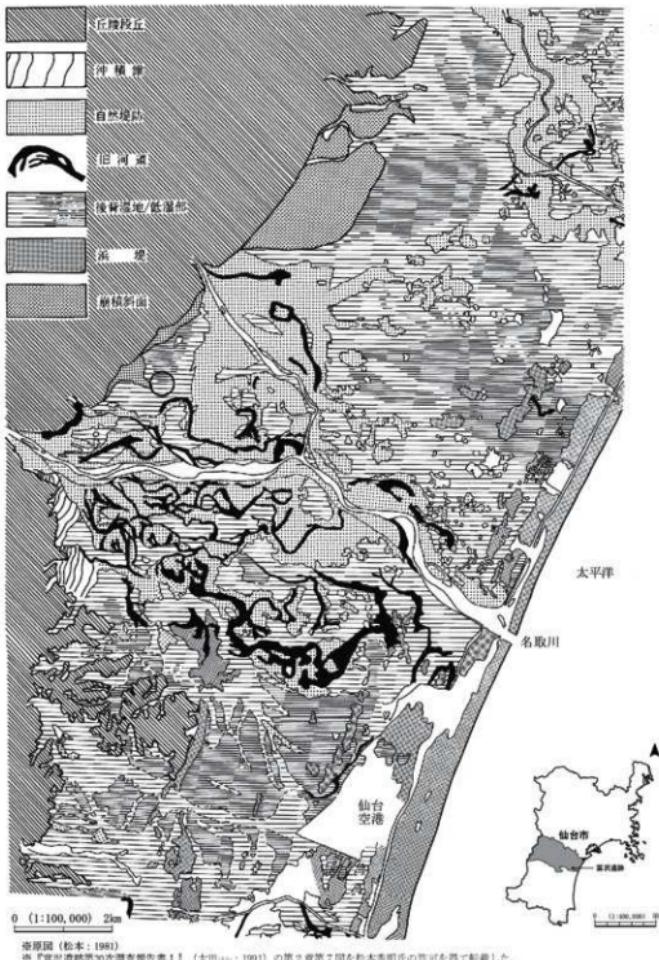
第1章 はじめに

第1節 富沢遺跡の概要

富沢遺跡は、宮城県仙台市の南東部、太白区富沢・泉崎・長町・長町南・鹿野等に所在する遺跡で、総面積約90haほどの広大な範囲に広がっている（第1・2図）。遺跡の南には名取川、北東には広瀬川が流れ、その両岸には自然堤防が発達している。青葉山丘陵と高館丘陵の間から平野部に流れ込む名取川の下流域西半部は扇状地性の沖積平野で、左岸は郡山低地、右岸は名取低地と呼ばれる。郡山低地の範囲は、南縁を名取川、北東縁を広瀬川、北西縁を「長町一利府線」（地質構造線）で画されている。富沢遺跡は郡山低地の中央西寄りで、広瀬川の自然堤防、名取川の支流で青葉山丘陵の太白山付近から流れる笊川の自然堤防に開まれた後背湿地に立地する。昭和50年代の土地区画整理事業以前は水田として利用され、旧地形は北西から南東方向に緩やかに傾斜していた。標高は約9～16mである。現在はその事業により盛土造成がなされ、大部分は住宅地や商業地となっている。

発掘調査は、昭和57年（1982年）以降、これまでに140回を超える調査が継続的に実施してきた。遺跡が発見された当初は富沢水田遺跡として登録されたが、その後弥生時代以降の水田跡が重層して存在していることが明らかとなり、また弥生時代の水田跡の下層から縄文時代の遺物が数地点で確認されたことや遺跡隣接地において中世の居住域と考えられる遺構群の存在が確認されたことから、昭和62年3月20日付けで「富沢水田遺跡」を改め「富沢遺跡」と遺跡名が改称された。代表的な調査例を見ると、昭和58年（1983年）の第7次調査では、弥生時代中期中葉（楕形壠式期）の水田跡が検出され、東北地方では青森県の垂柳遺跡について2例目の弥生時代の水田跡となり、東北地方南部における水田稲作の起源を解明する上で重要な調査となった（荒井：1984）。同年の第8次調査では、幅1.8～3m、深さ60～70cmの規模の水路跡（88層検出の6号溝）が検出され、水田に伴う灌漑用水路と考えられており、水路からは木製農具である長柄鋤や広鎌が出土している（工藤哲司ほか：1984）。その続きとみられる水路は第55次調査（佐藤甲二：1990）、第95次調査（我要：1997）でも見つかっている。また、昭和60年（1985年）の第15次調査では、弥生時代5時期・古墳時代1時期・平安時代3時期・中世3時期・近世1時期・近世末～明治初期1時期に渡る水田跡が検出され、弥生時代以降連続的な水田耕作が行われていたことが明らかとなった（斎野ほか：1987）。

さらに、昭和62年・63年（1987年・1988年）に実施された第30次調査（太田ほか：1992）では、縄文時代の包含層よりさらに深い場所から、約2万年前の旧石器時代の埋没林や焚火跡・石器が検出されている。石器は焚火跡の周辺から集中的に100点以上が出土し、接合資料も確認された。樹木や葉・種子・昆虫遺体・シカのフン等の動植物遺存体も見つかっており、旧石器時代の自然環境の様子をうかがうことができる重要な調査となっただ。現在、第30次調査範囲の一部は仙台市富沢遺跡保存館（地底の森ミュージアム）において、保存及び公開されている。その後の調査で、第30次地点のみならず、20の地点からも埋没林やそれに相当する腐植土層が確認され、旧石器時代の湿地林の広がりについても明らかになりつつある。これまでの調査結果から、旧石器時代の生活跡や埋没林、弥生時代から近世に至る水田跡が重層的に検出されている。

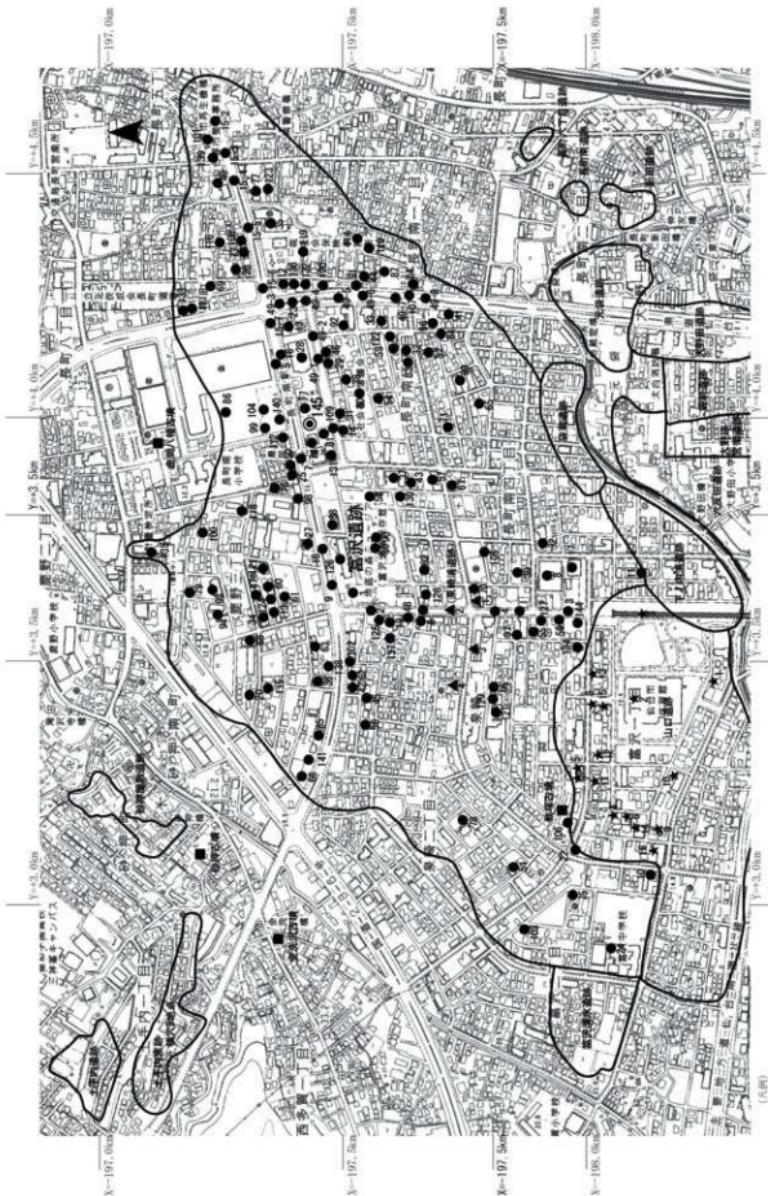


第1図 名取川下流域の微地形分類図

0 (1:10,000) 500m

第2図 富沢運動と周辺の道路

数字は高さを示す。▲は高さ約1.5m、「山形」1.0m、(左)1.0m、(右)0.8m
●は高さ約1.0m、「山形」0.8m、「山形」0.6m、(左)0.6m、(右)0.5m。
※各マップで表示したものは、実測測定でない。



第2節 調査要項

遺跡名 富沢遺跡（宮城県遺跡登録番号 01369 仙台市文化財登録番号 C－301）

所在地 宮城県仙台市太白区長町南3丁目1－10

調査原因 （仮称）仙台市南部発達相談支援センター建設に伴う事前調査

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 生涯学習部文化財課

調査指導係 主任 工藤信一郎

調査指導係 主事 水野一夫

調査組織 株式会社ノガミ

主任調査員（調査・整理） 石垣義則

調査補助員（調査） 長谷川一郎

計測員 松原幸彦

調査期間 平成22年8月23日～同年11月2日

調査対象面積 425m²

調査面積 178m²

整理期間 平成22年9月4日～平成23年3月18日

第3節 調査に至る経緯

富沢遺跡はこれまでに140次を越える調査が実施され、旧石器時代から近世までの複合遺跡として知られている。平成20年7月に、仙台市健康福祉局健康福祉部障害者支援課から、富沢遺跡地内の仙台市太白区長町南3丁目1に所在する太白区役所来庁者駐車場用地（1800.64m²）について、「（仮称）仙台市南部発達相談支援センター新築計画と埋蔵文化財のかかわりについて」の協議書が提出された。仙台市教育委員会では本工事が3階建で、杭基礎工事を伴うことから、富沢遺跡の地下遺構が損なわれると判断し、発掘調査の実施に向けて、建設事業の主管課である障害者支援課と協議を続け、富沢遺跡第145次調査として、同年8月23日より発掘調査を実施することとした。

第2章 調査方法と調査の経過

第1節 調査方法

調査対象地は仙台市太白区長町南3丁目1-10に位置する。調査区は太白区役所の西方約100mの地点で、(仮称)仙台市南部発達相談支援センターの建設予定地である。この場所は、調査が行われるまでは太白区役所の駐車場として利用されていた(第3図)。標高は10.8~11.3mである。

調査区は東西約20m、南北約19mの範囲を設定した(第4図)。野外調査に先立ち、仙台市障害者支援課・文化財課により調査区内のアスファルトの除去、盛土の掘削が行われた。調査区の壁面には傾斜を設け、壁面が崩れないようにした。調査区の西側には、南から北へ向かって緩やかな傾斜を設け、その場所に掘削土を運搬するためのベルトコンベアを設置した。傾斜の南側延長部分に、掘削土の置き場を設けた。掘削土は状況に応じて、ダンプにより搬出を行った。

調査区の座標は、国家座標(日本測地系)を基準とし、基準点・水準点を設置した。

調査は各層毎に精査をし、遺構検出、遺構掘削を行った。特に水田跡の検出作業は丁寧な薄削りを心がけた。水田跡の認定は、「水田跡の基本的理義ー仙台市における水田跡の検出と認定ー」(『第3回東日本の水田跡を考える会ー資料集』仙台農耕文化勉強会:1990)に基づいている。検出した遺構は写真撮影、計測作業を行った。計測作業はトータルステーション・レベルを使用し、写真撮影は同一カットを35mmモノクロフィルム、35mmカラースライドフィルム、デジタルカメラで撮影を行った。

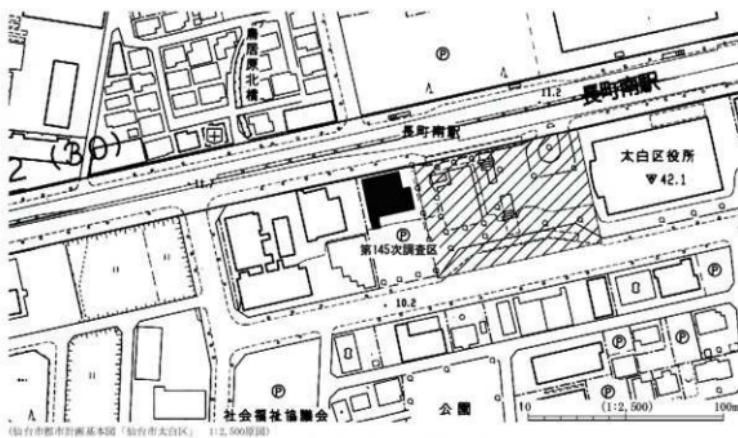
第2節 調査の経過

8月23日から旧駐車場全体をネットフェンス・キャスターで囲い、調査事務所の設置、発掘機材搬入等の準備作業を行った。25日に作業員を投入し、まずは調査区壁面をブルーシートで保護し、進入禁止のためのロープガイド・安全ロープを設置するなどの安全対策を行った。同日にはベルトコンベアを設置し、野外調査の準備が整った。26日に基準点・水準点測量を行った。26日~27日、排水溝を兼ねた土層観察用のトレーンチ掘削作業を行い、基本層を確認した。この時点で、土層断面に灰白色火山灰の存在が認められた。30日から、調査区の中央を北西から南東に分断する溝の掘削を行った。この溝からは、プラスチックやビニール、空き缶などが出土し、土地区画整理前の図面に記載されている水路と断定され、調査の対象となる水田跡とは直接的な関係のないことが確認された(第5図)。

9月6日から精査作業を行い、水田跡の検出作業を本格的に開始する。基本土層の観察から、5層上面が水田跡の第一面と考えられることから、まずは1層から4層までの掘削作業を行った。9日、3層上面でSD1を検出し、調査した。10日~24日、5層の水田跡の調査を行った。27日~30日、調査区の北側でのみ6層・7層の堆積が確認でき、各層の水田跡の調査を行った。調査区南側ではこれらの層が無いため、先行して8層の水田跡の調査を行った。

10月4日~6日、9層の水田跡を調査し、その後、弥生時代中期中葉の層序まで掘り下げ、12層上面で水田跡を確認した。7日~13日、12・13層の水田跡を調査した。各層から水田跡を検出したものの、弥生土器や水田稲作に関係する石器等は出土しなかった。14日~15日、縄文時代の包含層は、周囲の調査結果より弥生時代の遺構面から1.5~2m下に堆積すると想定された。事前に調査区北西隅を深堀りし、下位の層序を把握した上で間層を縄文時代早期相当層(39層・40層)の直上まで約2mを重機で掘削した。間層掘削を行うにあたり、安全性を考慮し1m程度下げた後は壁面から1m離してから下げ、壁面が崩落しないように対策を講じた。37層

上面の標高は約6.4mである。18日、縄文時代の調査範囲（約6.8m×約3.0m）を設定し、排水溝を兼ねた土層観察用のトレーンチ掘削を行った。19日～20日に縄文時代早期の包含層相当である39層・40層の調査を行ったが、いずれの層でも遺構や遺物は確認できなかった。21日から、旧石器時代の調査へと移る。縄文時代の調査範囲よりさらに狭めた範囲（約3.6m×約3.0m）を設定し、41層以下の調査を行った。粗砂層からは湧水がみられ、壁面崩落の危険性が高いため、段を設けて掘削作業を行った。標高約5.2mまで掘削し、その後調査範囲をさらに小さくし（約2.0m×約1.8m）、調査を進めた。最終的に標高3.24mで灰オリーブ色の粘土層（57層）を確認し、掘削作業を終了する。26日、全景を撮影し、調査を終了した。27日以降は、発掘機材の搬出等の撤収作業を行つた。11月2日に文化財課から障害者支援課へ現場の引渡しを行い、野外調査は終了した。



第3章 基本層序

調査区内には、区画整理に際して約2mの厚さで盛土がなされていた。今回の調査では、その直下の基本層1層から約5.8m掘り下げ、基本層57層まで確認した(第6~8図、第1表、写真図版1、2-1)。層によっては、色調や混入物の違いで、さらに細分した層もある。自然堆積層が薄く連続して堆積する互層については、土質や色調が大きく変化する部分をもって層離面とした。各層の主体となる土質は、粗砂、細砂、シルト、シルト質粘土、粘土、泥炭質粘土のいずれかで、シルトと粘土の中間的な土質のものをシルト質粘土とした。泥炭質粘土については、「未分解の有機質である植物遺体を一定量含む粘土」という意味で使用する。混入する植物遺体は、栽培植物である稻、葦などの湿地帯にみられるイネ科の多年草などが想定される。土質によって植物遺体の分解が進み、肉眼観察での植物遺体の同定は難しい状況であった。土色は時間の経過により変色するため、土層注記に記した土色は削った直後の色調である。特に、グライ化が顕著な39層以下の変色は著しい。39層~41層では、灰オリーブ色や褐灰色が基調であるが、時間の経過により、黄色味が強くなる。42層以下は、緑灰色や青灰色を基調であるが、時間の経過により、黄色から赤味がかった色調へ変化する。

次に、各層の特徴を個別に記述する。

- 1層 灰黄褐色の砂質シルトである。旧水田土壤で、部分的に鉄分の沈着が認められる。土師器の細片が2点出土した。
- 2層 灰黄褐色の砂質シルトである。自然堆積層とみられ、直径3mm程度の白色砂粒を多く含む。
- 3層 灰黄褐色のシルトである。基本層1層の削平により堆積する範囲は限られ、主に調査区の北側に堆積する。その状況は、調査区北壁や東壁で確認できる。直径3mm以下の白色砂粒が微量に混入する。層下面には耕作による起伏がある。水田土壤である。
- 4層 褐灰色のシルトである。自然堆積層である。層厚が2~4cm程度で、にぶい黄橙色の細砂が薄く、線状に堆積する。
- 5層 黒褐色の粘土である。粘性・しまりともに強い。植物遺体も少量混入する。植物遺体は細かく、泥炭質粘土に混入する植物遺体とは異なるとみられる。5層は調査区全域に堆積する。耕作の影響は、場所によって基本層8層上面まで達している。灰白色火山灰がまばらに混入し、特に調査区の南側で認められる。灰白色火山灰をやや多く含む部分を5'層とした。5層から須恵器の細片が1点のみ出土した。灰白色火山灰降下以降の水田土壤である。
- 6層 黒色の粘土である。耕作の影響により上面がやや起伏し、場所によって削平を受けており、調査区北側の一部にのみ堆積する。5層水田跡に伴う一連の水田土壤の可能性がある。灰白色火山灰降下以前の水田土壤である。
- 7層 灰黄褐色の粘土である。6層より粘性が強い。6層同様に、耕作の影響を受けている。調査区北側の一部に堆積し、調査区南壁でもわずかに確認できる。5層水田跡に伴う一連の水田土壤の可能性がある。灰白色火山灰降下以前の水田土壤である。
- 8層 主体は黒褐色である。層中には、にぶい黄褐色粘土の薄層が堆積し、互層をなす。調査区全域に堆積する。8層以下から、にぶい黄褐色を呈する植物遺体の混入するようになる。
- 9層 9層は灰黄褐色の粘土である。上位には色調が暗い部分もある。9層は調査区全域に堆積する。遺物は出土していない。平安時代以前の水田土壤である。
- 10層 褐色の泥炭質粘土である。自然堆積層で、植物遺体が極めて多量に混入する。植物遺体の遺存状態が良く、茎や葉等の形状も残る。前後層よりもしまりが強く、やや硬い層である。

- 11層 土質や色調の差から、11a層と11b層に細分した。11a層は黒色の泥炭質粘土、11b層は黒褐色の泥炭質粘土である。いずれも自然堆積層である。11a層は全域に堆積するが、11b層は主に調査区南側に堆積する。
- 12層 暗褐色の泥炭質粘土である。植物遺体が多量に混入し、褐色の粘土がまばらに混入する。植物遺体は分解度が低いため遺存状況も良いが、稻か草かは断定できなかった。遺物は出土していない。平安時代以前の水田土壌である。
- 13層 黒色の泥炭質粘土である。耕作の影響により下面が顕著に乱れる。12層同様に植物遺体が多量に混入する。遺物は出土していない。平安時代以前の水田土壌である。
- 14層 暗褐色の泥炭質粘土である。13層より植物遺体の混入が多く、極めて多量である。13層の泥炭質粘土より未分解で、植物遺体の形状が大きい。
- 15層以下は自然堆積層で、40層までは比較的水平に堆積するが、41層以下からは層の上下に起伏が認められるようになる。
- 15層 黒褐色の泥炭質粘土である。14層同様に植物遺体が多量に混入する。14層の泥炭質粘土より分解が進み、植物遺体の形状は小さく、やや細かい。
- 16層 にぶい黄褐色の粘土である。前後する層より明らかに植物遺体の混入が少なく、比較的均質である。17層が厚く堆積する部分には認められない。
- 17層 主体は暗褐色の泥炭質粘土である。にぶい黄橙色の粘土が薄く堆積し互層をなす。
- 18層 黒褐色の泥炭質粘土である。植物遺体が多量に混入する。
- 19層 主体は、にぶい黄橙色の粘土である。細かな植物遺体を含んだ黒褐色の粘土が薄く堆積し互層をなす。
- 20層 主体は、にぶい黄橙色の粘土である。19層と比較して黒褐色粘土の層数が多い。19層より細かな植物遺体を多く含む。
- 21層 褐灰色の泥炭質粘土である。植物遺体が極めて多量に混入する。
- 22層 黒褐色の泥炭質粘土である。18層と色調が近似し、21層より粘性が強い。植物遺体が多量に混入する。
- 23層 主体は、にぶい黄橙色の粘土である。細かな植物遺体を含んだ黒褐色粘土が薄く堆積し互層をなす。
- 24層 にぶい黄褐色の泥炭質粘土である。植物遺体が多量に混入する。
- 25層 褐色の泥炭質粘土である。しまりがやや強い。調査区の東側で堆積する。
- 26層 暗褐色の泥炭質粘土である。植物遺体が極めて多量で、にぶい黄橙色粘土が薄く堆積して互層をなす。
- 27層 黒色の粘土である。混入物が少なく比較的均質である。粘性が非常に強い。
- 28層 灰黄褐色の粘土である。粘性が強いものの、27層と比べるとやや弱い。
- 29層 黒色の粘土である。混入物が少なく比較的均質である。粘性が非常に強い。
- 30層 主体は、にぶい黄橙色の粘土である。にぶい黄橙色の細砂が非常に薄く堆積し互層をなす。
- 31層 主体は、にぶい黄橙色の粘土である。細かな植物遺体が混入する黒褐色粘土と褐灰色粘土が互層をなす。
- 32層 黒色の粘土である。植物遺体の混入が少なく、粘性が強い。
- 33層 にぶい黄橙色の粘土、細かな植物遺体を含む黒褐色粘土、褐灰色の粘土、浅黄橙色の粘土が互層をなして堆積する。他の層と比較して厚みがあり、その層厚は29～36cmである。
- 34層 褐灰色の粘土である。層中の下部に、にぶい黄橙色粘土が薄く堆積し互層をなす。
- 35層 黒色の粘土である。植物遺体の混入が少なく、粘性が強い。
- 36層 黑褐色の粘土である。35層と極めてよく似た土質であるが、35層より色調がやや明るい。
- 37層 灰黄褐色の粘土である。部分的に38層の粗砂が混入する。

- 38 層 主体は黄褐色の粗砂である。浅黄色の粘土がまばらに混入する。調査区北東側の崖地状に低くなった部分に堆積する。
- 39 層 オリーブ灰色の粘土である。粘性が非常に強い。層厚は3～17cmほどで、東に向かってやや厚く堆積する。縄文時代早期の包含層相当と想定されるが、遺物は出土しなかった。
- 40 層 褐灰色のシルト質粘土である。39層同様に粘性が非常に強く、しまりも強い。縄文時代早期の包含層相当と想定されるが、遺物は出土しなかった。
- 41 層 褐灰色の細砂である。直徑5mm程の褐灰色の粘土ブロックがまばらに混入する。41層以下でも植物遺体の少量もしくは微量の混入が認められる。泥炭質粘土に混入する植物遺体よりも、色調が明るいにぶい黄橙色を呈する。植物遺体の形状は非常に細かい。
- 42 層 主体は明緑灰色の粗砂である。色調の明るい明緑灰の粘土ブロックがまばらに混入する。
- 43 層 明緑灰色のシルト質粘土である。前後層と比較してしまりが非常に強い。緑味が強い緑灰色の粘土ブロックがまばらに混入する。
- 44 層 明緑灰色のシルトである。43層よりシルト質が強い。著しく起伏する。
- 45 層 主体は緑灰色のシルト質粘土である。緑灰色の粗砂がブロック状に混入する。しまりが非常に強い。
- 46 層 緑灰色のシルト質粘土である。土質は45層と近似するが、45層と比較して粗砂の混入が少ない。
- 47 層 緑灰色の粘土である。しまりが非常に強く、最も掘削に困難を要した層のひとつである。46層同様に粗砂が混入するものの、その混入量は少ない。直徑3mm程の緑灰色粘土ブロックがまばらに混入する。

基本層48～50層、57層は旧石器時代の埋没林を包含している層と想定されるが、今回の調査では類する痕跡は認められなかった。

48 層 明緑灰色のシルトである。しまりは強いが47層ほどではない。緑灰色粘土ブロックが混入するがその量は少ない。分解が進んだ細かい纖維状の植物遺体が微量混入するが、葉や種果等の形状が明らかな植物遺体は出土しなかった。

49 層 明緑灰色のシルトである。緑灰色粘土ブロックが混入するが、その量は少ない。著しく起伏する。

50 層 緑灰色の粘土である。47層同様に非常にしまりが強く、最も掘削に困難を要した層のひとつである。

51 層 明青灰色のシルト質粘土である。しまりが弱く、50層と比較して掘削しやすい。

52 層 青灰色の粗砂である。調査区東側でのみ堆積する。しまりが弱く、崩れやすい。

53 層 緑灰色のシルト質粘土である。しまりやや強く、部分的に粗砂が混入する。

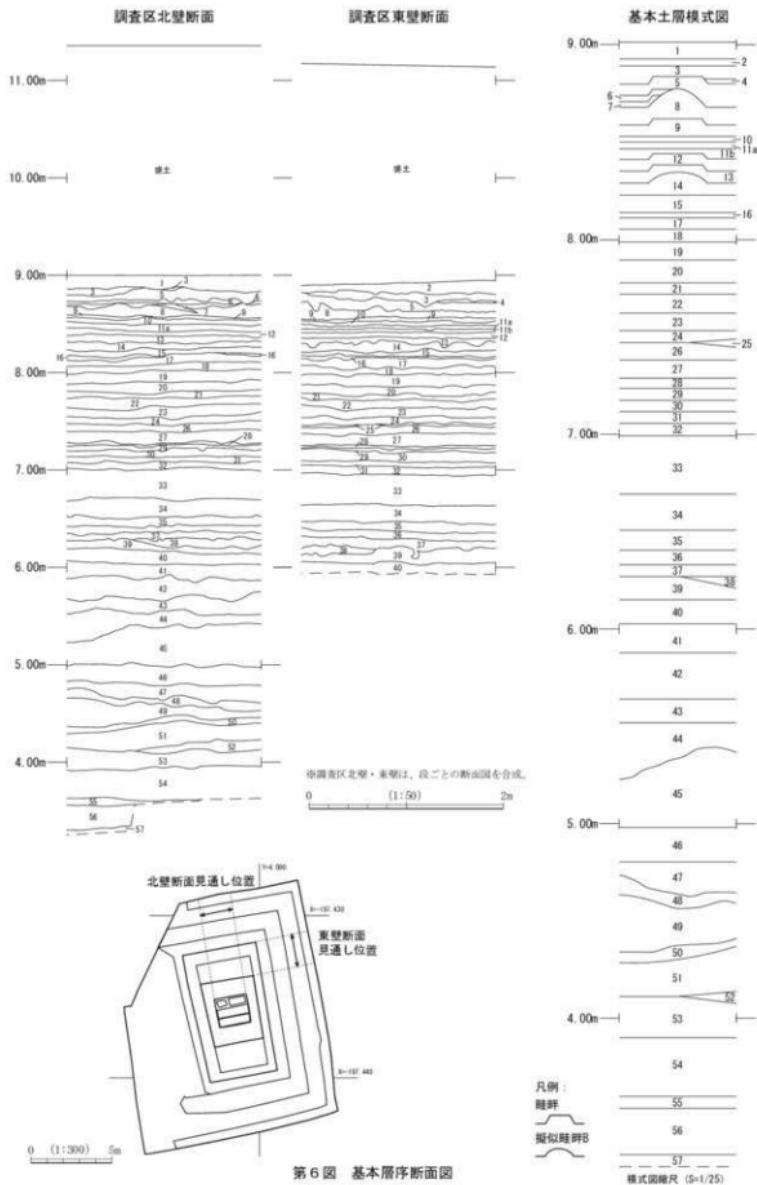
54 層 青灰色の粗砂である。しまりが弱く、崩れやすい。また、湧水が認められ、少しづつ侵食する。

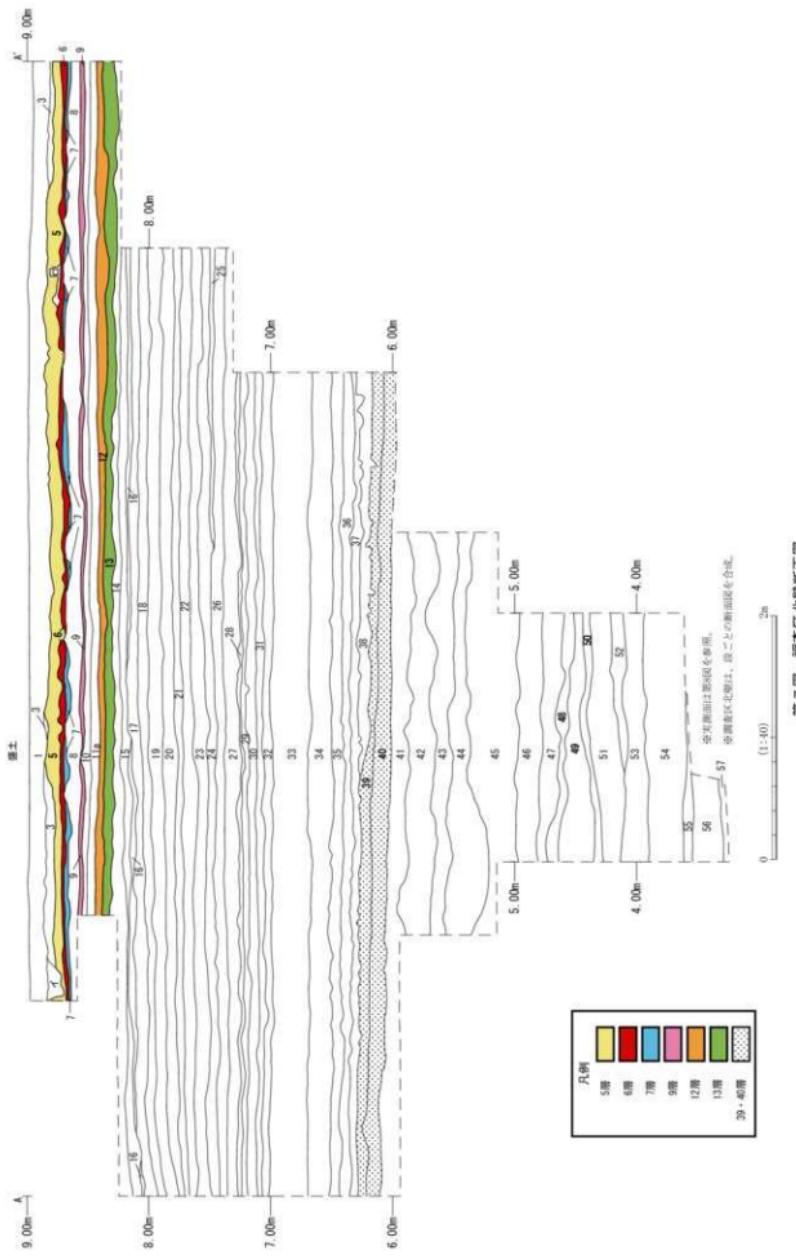
55 層 緑灰色のシルト質粘土である。しまりがやや強く、部分的に粗砂が混入する。

56 層 青灰色の粗砂である。54層より湧水の量が多くなり、崩れやすい。

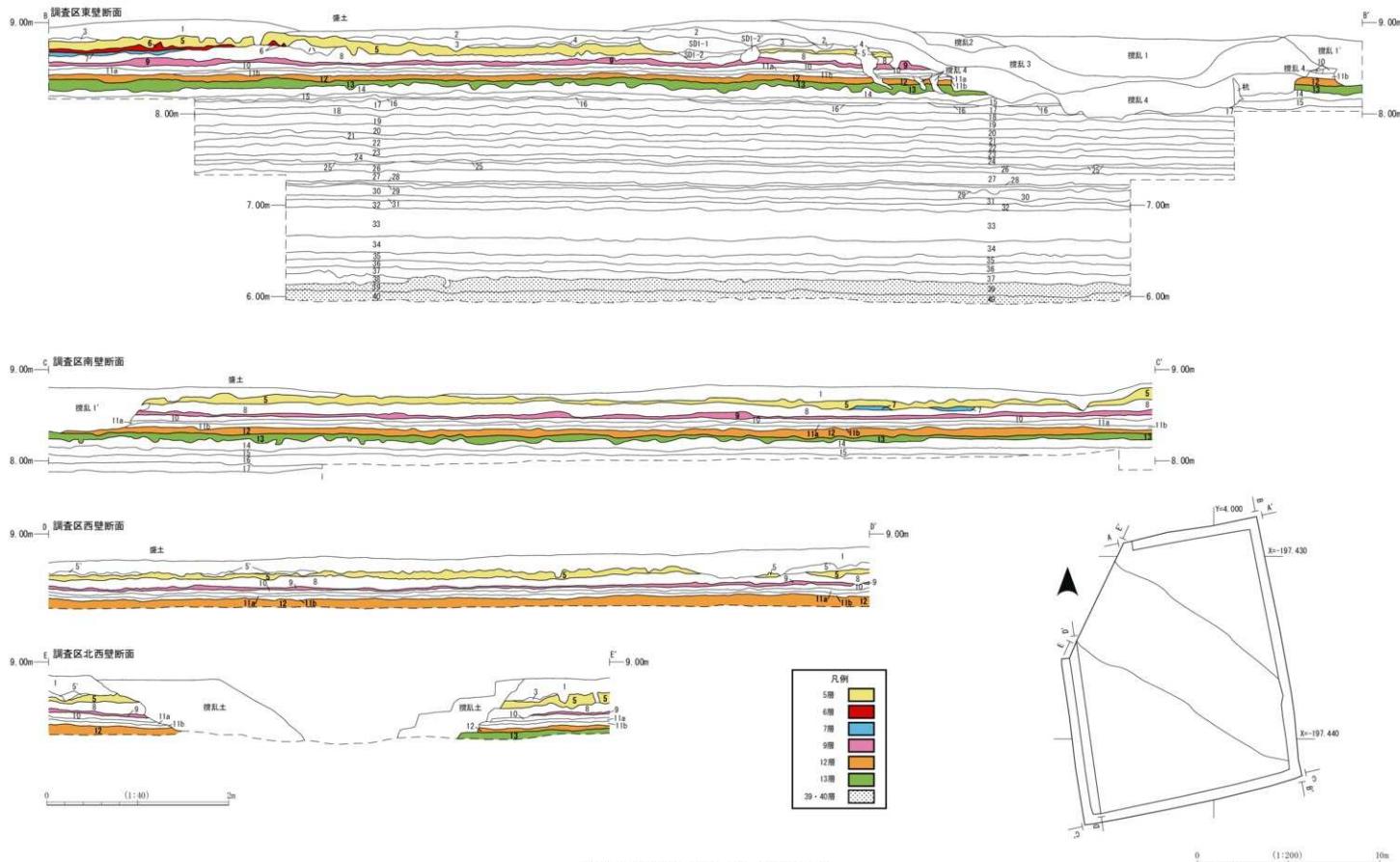
57 層 灰オリーブ色の粘土で、粘性が強く、細かな纖維質の植物遺体が微量混入する。層厚4cm程度確認できたものの、湧水の影響により、本来の層厚の確認には至らなかった。

第1表 基本層の土層注記





第7図 調査区北壁断面図



第4章 調査の概要

遺構は、基本層5層、6層、7層、9層、12層、13層を水田土壌とする水田跡と、基本層3層上面で溝跡を1条検出した。遺物は基本層1層と5層から計3点が出土した。出土遺物から5層は平安時代と考えられる。

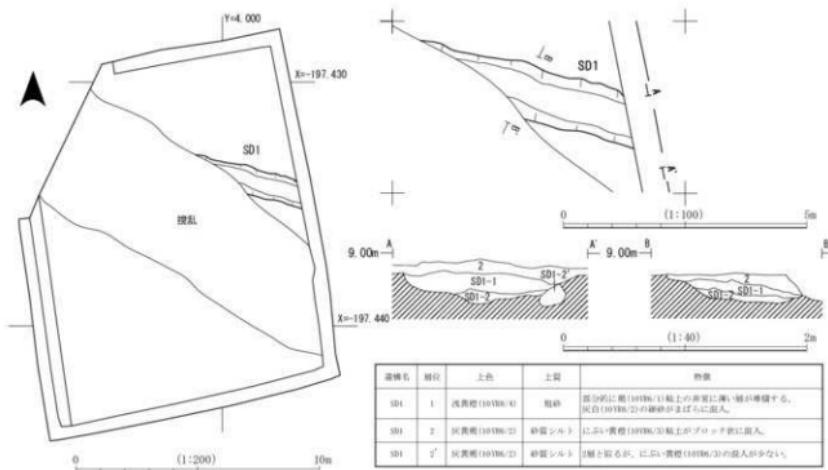
水田跡を報告するにあたり、畦畔は畦畔1、畦畔2、…と、水田区画は区画①、区画②、…と表記する。

第1節 3層上面

3層は灰黄褐色のシルトである。主に調査区北側に堆積する。3層の下面是耕作の影響で起伏することから水田土壌と考えられるが、上部を削平されているために、畦畔は確認できなかった。

SD1(第9図、写真図版3-2・3)

3層上面で、SD1を検出した。SD1の西側は現代の水路で壊されている。SD1は長さが残存値で5.6m、幅が105～110cm、深さが約18cmを測り、断面形は弧状を呈する比較的浅い溝である。主軸方向はN-75°-Wで、概ね東西軸であるが、北へやや振れる。底面には、わずかに凸凹が認められる。底面の標高は、東側が約8.6m、西側が約8.58mと西側へ向かってわずかに傾斜するが、検出した部分が短いため、水の流れていた方向ははっきりしない。堆積土は2層に大別され、SD1-1層は浅黄褐色の粗砂、SD1-2層は灰褐色の砂質シルトである。SD1-1層は、調査区北壁の西端に堆積する1層と酷似する(第7図)。SD1-2層は、にぶい黄褐色の粘土の混入量でさらに細分した。いずれの層からも遺物は出土しなかった。基本層序からは、3層が灰白色火山灰を含む5層より上位に堆積することから、SD1の時期は10世紀前半以降である。



第9図 3層上面平面図・SD1断面図

第2節 5層上面（第10・13図、第2表、写真図版3-4～6）

5層水田跡では、東西方向の畦畔1と、それに直行する畦畔2条で区画された水田区画を2区画検出した。

〈層の特徴〉 5層は黒褐色の粘土である。わずかに灰白色火山灰が混入する。この火山灰は、層中の上位に混入する傾向がある。5層の層厚は5～25cmであるが、10cm程度のところが多く、調査区全域に堆積する。5層は、1層の削平や3層の耕作を受けており、調査区北側の遺存状況は比較的良好であるが、調査区南側の遺存状況は悪い。〈畦畔〉 畦畔1の方向はN-81°-Wで概ね東西軸であるが、北へやや振れる。畦畔1の北側はトレンチで切られ、全形は不明であるが、上端幅は68～102cm、下端幅は推定値で280cmを測り、西側へ向かって幅が狭くなる。水田面との比高差2～5cmで、西側よりも東側のほうが畦畔の高まりが明瞭である。断面を観察すると、東壁断面では、5層直下に5層土を主体に6層・7層土の小ブロックが混入するハ層が堆積し、北壁断面では、5層直下に黒褐色粘土が主体で、にぶい黄橙色の粘土ブロックが混入するロ層が堆積する（第13図）。これらの層は畦畔の構築土の一部とみられる。畦畔2の方向はN-13°-Wで概ね南北軸で、やや東へ振れる。下端幅は220～251cmと比較的幅広で、畦畔1と規模は類似する。水田面との比高差は1～2cmを測り、畦畔1と比べると明瞭な高まりではない。畦畔3の全形は不明であるが、畦畔2と平行する。

〈水田区画〉 区画①は5.8×11.5m以上で、標高は8.70～8.715mである。区画②が4.3×14.0m以上で、標高は8.65～8.70mである。区画①・②ともに北から南へかけて緩やかな勾配を持つ。

〈時期〉 須恵器の細片が1点出土した。5層には灰白色火山灰の存在が認められるので、水田跡の時期は灰白色火山灰降下以降である。

第3節 6層上面（第11・13図、第2表、写真図版3-8）

6層水田跡では、畦畔1とそれに直行する畦畔2により区画された水田区画を2区画検出した。

〈層の特徴〉 6層は黒色の粘土である。5層よりも植物遺体が多く混入する。6層は畦畔1の北側のみに堆積する。畦畔1の南側には本来6層が堆積していたと思われるが、5層の耕作が8層上面まで達していることから、6層が削平されたことによって、水田土壤や畦畔は確認できなかった（第13図）。

〈畦畔〉 畦畔1は5層で検出した畦畔1と同位置で検出した。畦畔2の方向はN-3°-Eで、ほぼ南北軸である。上端幅は58～60cm、下端幅は90cmを測り、水田面との比高差は1～2cmである。畦畔の北側が途切れる状況から、水口の可能性もある。

〈水田区画〉 区画①・②は調査区北壁際で一部を検出した。区画1は0.8×2.2m以上で、標高は約8.76mである。区画2は1.0×1.2m以上で、標高は約8.75mである。

〈時期〉 遺物は出土しなかった。基本層序から、6層が灰白色火山灰を含む5層より下位にあることから、水田跡の時期は同火山灰降下以前の平安時代と考えられる。

第4節 7層上面（第12・13図、第2表、写真図版4-1）

7層水田跡では、畦畔1とそれに直行する畦畔2により区画された水田区画を2区画検出した。水田区画は、6層水田跡と類似する。

〈層の特徴〉 7層は灰黄褐色の粘土である。調査区南壁の一部で7層の堆積が認められるが、主に畦畔1の北側に堆積し、その範囲は6層と類似する。畦畔1より南側は、6層同様に5層の耕作が8層上面まで達しているため、水田土壤や畦畔を検出することはできなかった（第13図）。

〈畦畔〉 畦畔1は、5層及び6層で検出した畦畔1と同位置で検出した。畦畔2は、6層で検出した畦畔2とほぼ同位置で検出した。畦畔2の上端幅は62～70cm、下端幅は90cmを測り、水田面との比高差は1～2cmである。

6層水田跡の水口が、7層水田跡では同位置で検出されなかった。畦畔1・2の直下で擬似畦畔Bを確認した。

〈水田区画〉区画①は規模が $0.6 \times 2.5m$ 以上、区画②は $1.0 \times 1.2m$ で、いずれの標高も約8.715mである。

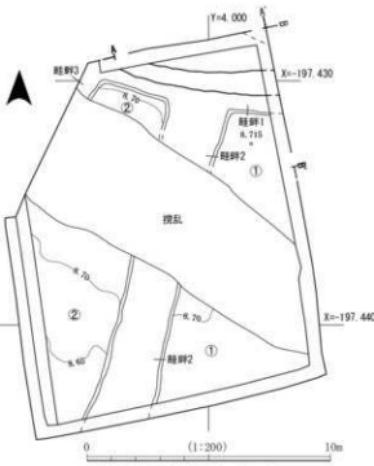
〈時期〉遺物の出土はなかった。基本層序から、水田跡の時期は6層同様に灰白色火山灰降下以前の平安時代と考えられる。

第5節 9層上面

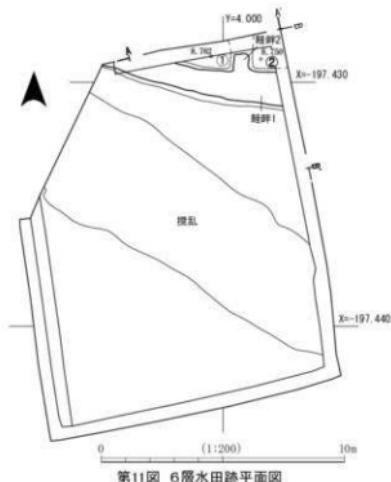
(第14・15図、第2表、写真図版4-3・4)

9層水田跡では、畦畔8条により区画された水田区画を8区画検出した。

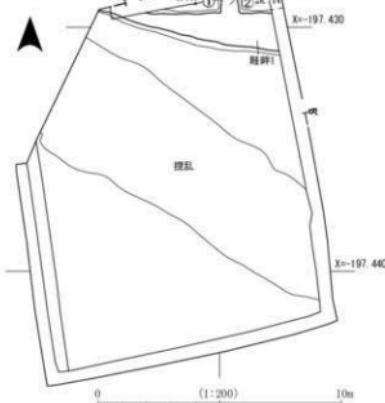
〈層の特徴〉9層は灰黄褐色の粘土である。上位の色調がやや暗い部分もある。基本層8層(自然堆積層)に覆われているため、耕作の影響を直接受けていない。



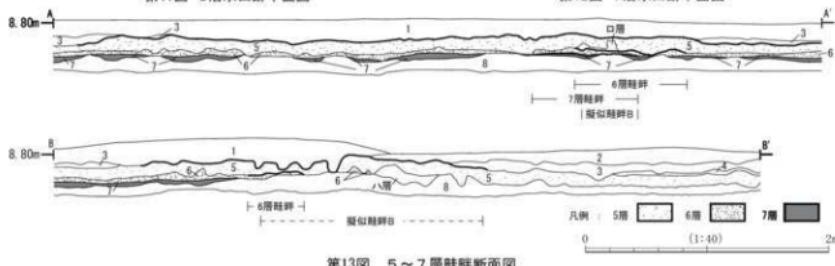
第10図 5層水田跡平面図



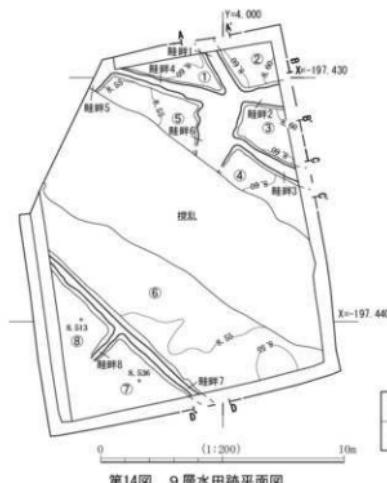
第11図 6層水田跡平面図



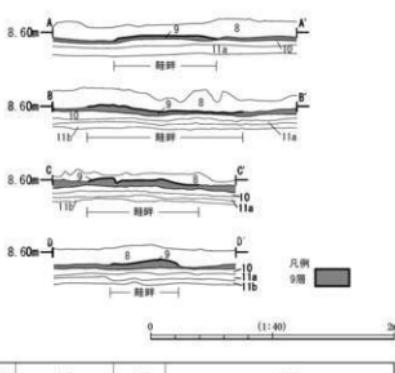
第12図 7層水田跡平面図



第13図 5～7層畦畔断面図



第14図 9層水田跡平面図



第15図 9層畦跡断面図

〈畦跡〉 搾乱を境にして、北側では畦跡6から派生した畦跡1～4が不規則な配列を呈する。畦跡6は他よりもやや幅広で、上端は140～165cm、下端は170～191cmを測り、南に向かって幅が狭くなる。畦跡6は本来、畦跡7まで延びるものと考えられるが、水田跡の遺存状況が悪く検出できなかった。畦跡1～4はやや細めの畦跡で、上端幅は20～88cm、下端幅は48～115cmを測り、水田面との比高差は1～4cmである。一方、南側では畦跡7と畦跡8が直行し、T字状を呈する。畦跡8は南西へ延びるにつれ、比高差もとなり途切れる。その延長線上の西壁断面を確認したが、9層上面の高まりは認められなかった。畦跡7・8もやや細めの畦跡で、上端幅は12～20cm、下端幅は36～70cmを測り、水田面との比高差は1～2cmである。

〈水田区画〉 北側では区画を5区画検出したが、いずれも不整形である。区画①は1.5×4.0m以上、区画②は2.0×2.0m以上、区画③は2.0×2.5m以上、区画④は1.6×4.3m以上である。区画①～④の標高は約8.60mである。区画⑤は2.0×4.4m以上で、標高は約8.55mである。南側では区画を3区画検出した。畦跡6の南側が不明であるが、区画⑥は区画④・⑤とは分かれるものと推定する。区画⑦は3.5×3.8m以上で、標高は約8.53mである。区画⑧は2.8×3.3m以上で標高は約8.51mである。

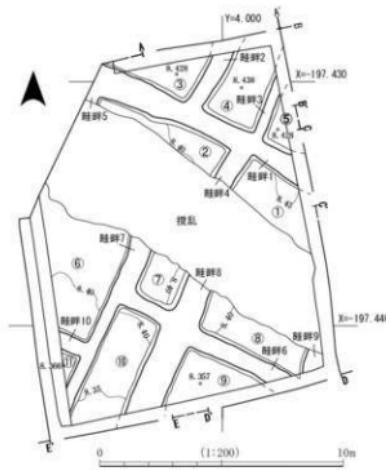
〈時期〉 遺物は出土していない。水田跡の時期は平安時代以前と考えられる。

第6節 12層上面（第16・18図、第2表、写真図版2-2、4-5・6）

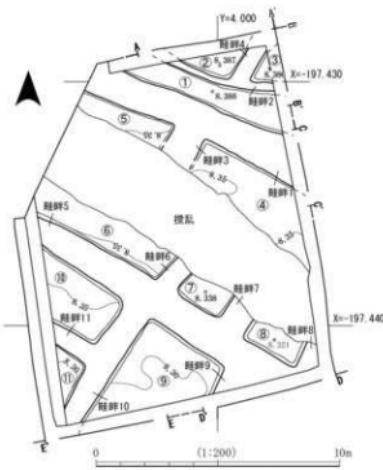
12層水田跡では、畦跡10条により区画された水田区画を11区画検出した。

〈層の特徴〉 12層は暗褐色の泥炭質粘土である。褐灰色の粘土小ブロックがまばらに混入する。層厚は5～11cmで、耕作の影響で下面がやや起伏する。12層は基本層11a層・11b層（自然堆積層）に覆われており、上層の水田耕作の影響を受けていない。遺存状況は良好であった。

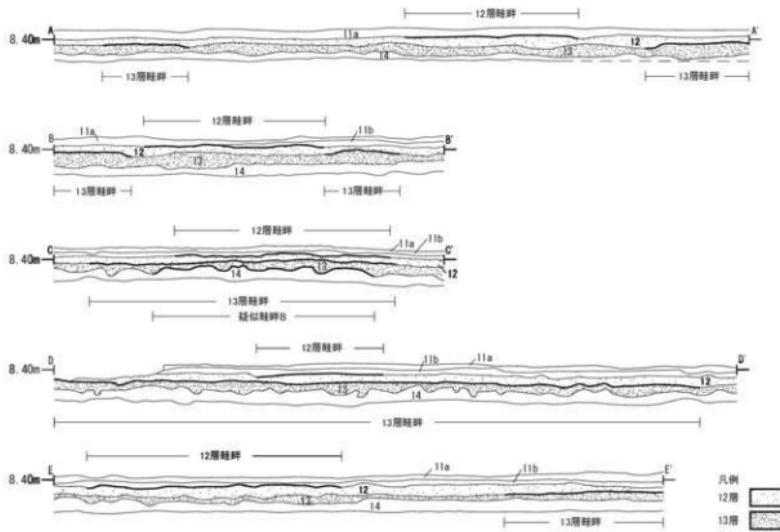
〈畦跡〉 畦跡の方向は、畦跡1・10がN-65°-W、畦跡6がN-62°-Wとほぼ同方向で、他の畦跡はそれらに直行する。畦跡1～10の上端幅は50～130cm、下端幅は67～158cmを測り、水田面との比高差は1～6cmである。搾乱で切られているため断定できないが、畦跡4と畦跡8は同一の畦跡であった可能性もある。



第16図 12層水田跡平面図



第17図 13層水田跡平面図



部位	土色	土質	特徴
12	暗褐(10YR3/3)	泥炭質粘土	植物遺体多量、雨灰(10YR6/1)粘土がまばらに混入。
13	黒(10YR2/1)	泥炭質粘土	植物遺体多量、耕作による影響で下部が乱れる。

第18図 12・13層水田跡断面図

〈水田区画〉中央の搅乱を挟み南北の畦畔のつながりが取れない部分があったが、畦畔の方向から推定すると、水田区画は北東—南西軸の長方形や短冊状の方形が推測される。区画①と区画⑧は同区画の可能性があり、その規模は約 $4.5 \times 6.7\text{m}$ で、面積は約 30m^2 である。区画②は $1.2 \times 5.5\text{m}$ 以上で、標高は約 8.40m である。区画③は $1.8 \times 3.0\text{m}$ 以上、区画④は $1.8 \times 3.4\text{m}$ 以上、区画⑤は $1.1 \times 1.8\text{m}$ 以上で、いずれの標高も 8.43m 前後である。区画⑥は $4.0 \times 4.5\text{m}$ 以上、区画⑦は $1.5 \times 1.7\text{m}$ 以上で、いずれの標高も約 8.40m である。区画⑨は $2.2 \times 3.2\text{m}$ 以上で、標高は約 8.35m である。区画⑩は $1.7 \times 5.1\text{m}$ 以上で、標高は $8.35 \sim 8.40\text{m}$ である。区画⑪は調査区西壁際でわずかに確認した。

〈時期〉遺物は出土していない。水田跡の時期は平安時代以前である。

第7節 13層上面（第17・18図、第2表、写真図版4-7-8）

13層水田跡では、畦畔11条により区画された水田区画を11区画検出した。

〈層の特徴〉13層は黒色の泥炭質粘土である。層下面には耕作による起伏がある。層厚も $2 \sim 14\text{cm}$ と数値に幅があるが、 8cm 程度が大部分で、調査区全域に堆積する。12層の耕作の影響を直接受けているもの、遺存状況は比較的良好であった。

〈畦畔〉畦畔1の方向は $N - 66^\circ - W$ で、概ね北西—南東方向であるが南へやや振れる。畦畔1の上端幅は $128 \sim 160\text{cm}$ 、下端幅は $145 \sim 182\text{cm}$ で水田面との比高差は $0.5 \sim 4.0\text{cm}$ である。畦畔1の直下で擬似畦畔Bを確認した。その他の畦畔の方向は、畦畔1に平行あるいは直行する。畦畔3は畦畔1と平行する幅の狭い畦畔で、その間（区画①）の13層下面の乱れがやや弱いことから、元々は畦畔1と一連の幅が広い畦畔であった可能性もある。畦畔3～11の上端幅は $65 \sim 138\text{cm}$ 、下端幅は $90 \sim 160\text{cm}$ を測り、水田面との比高差は $0.5 \sim 4\text{cm}$ である。

〈水田区画〉中央の搅乱を挟み南北の畦畔のつながりが取れない部分があったが、水田区画は北東—南西軸の長方形や短冊状の方形と推測される。区画②は $1.4 \times 2.0\text{m}$ 以上で、標高は約 8.38m である。区画③は調査区東壁でわずかに確認した。区画④は $2.1 \times 6.0\text{m}$ 以上、区画⑤は $0.9 \times 3.8\text{m}$ 以上、区画⑥は $1.3 \times 6.1\text{m}$ 以上で、いずれの標高も約 8.35m である。区画⑦は $1.1 \times 2.0\text{m}$ 以上で、標高は約 8.33m である。区画⑧は $0.9 \times 2.1\text{m}$ 以上で、標高は約 8.32m である。区画⑨は $2.0 \times 4.0\text{m}$ 以上で、標高は約 8.35m である。区画⑩は $3.6 \times 4.9\text{m}$ 以上、区画⑪は $1.4 \times 1.8\text{m}$ 以上で、いずれの標高も 8.30m である。

〈時期〉遺物は出土していない。水田跡の時期は平安時代以前である。

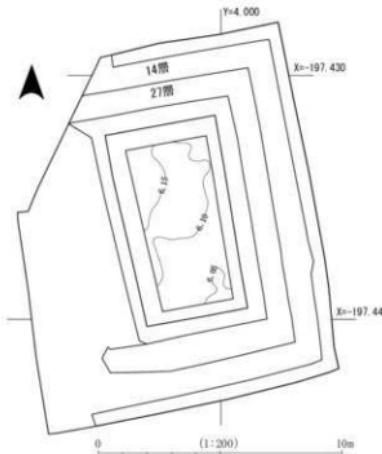
検出層位	No.	方向	残存長 (cm)	上端幅 (cm)	下端幅 (cm)	高さ (cm)	備考 (cm)
5	1	N-81°-W	5.40	68~192 (85)	280	2~5	2層～5層まで露頭。
5	2	N-13°-E	13.00	199~223 (206, 5)	220~251 (235, 5)	1~2	
5	3	N-40°-E	0.92	-	-	1	
6	2	N-2°-E	0.28	26~62 (59)	29	1~2	7層～8層まで露頭。
6	2	N-2°-E	0.65	40~50 (66)	59	1~2	
7	1	N-27°-W	0.08	45~50 (47, 5)	59	1	
9	1	N-98°-E	1.60	36~88 (63)	68~72 (100)	1	
9	2	N-98°-E	1.60	24~40 (32)	72~115 (93, 5)	2~3	
9	3	N-69°-W	2.95	29~53 (36, 5)	92~66 (59)	1~2	
9	4	N-72°-W	4.28	48~83 (65, 5)	1~4		
9	5	N-20°-E	0.08	-	-	1	
9	6	N-23°-E	2.11	149~165 (152, 5)	179~191 (189, 5)	1~3	
9	7	N-46°-W	8.20	20~26 (22)	55~70 (62, 5)	1~2	
9	8	N-43°-E	1.60	12~20 (16)	36~48 (42)	1	
12	1	N-65°-W	8.95	81~118 (109, 5)	112~138 (125)	2~6	
12	2	N-28°-E	2.55	62~20 (66)	91~102 (96, 5)	2~4	
12	3	N-23°-E	2.35	-	67~70 (68, 5)	2~2	
12	4	N-23°-E	0.28	26~82 (79)	110~113 (111, 5)	1~2	
12	5	N-23°-E	0.35	-	-	1~2	
12	6	N-62°-W	7.80	52~72 (62)	84~100 (92)	1~4	
12	7	N-26°-E	7.15	50~82 (66)	79~108 (89)	1~4.5	
12	8	N-26°-E	5.70	118~130 (120)	142~158 (150)	2~3	
12	9	N-26°-E	0.80	-	-	0.5~1.5	
12	10	N-42°-W	0.08	62	398	1	
13	1	N-66°-W	8.70	128~169 (144)	145~182 (163, 5)	0.5~4	人形跡。
13	2	N-74°-W	4.30	32~35 (33, 5)	49~56 (48)	1.5~2.5	
13	3	N-26°-E	0.96	138	155	1~1.5	
13	4	N-27°-W	1.55	65	82	0.5~2	
13	5	N-58°-W	1.50	106~128 (122)	130~160 (145)	2~3	
13	6	N-38°-E	1.00	-	77	2~3	
13	7	N-32°-E	1.00	115	122	2~3	
13	8	N-25°-E	1.24	-	-	1	
13	9	N-26°-E	0.70	-	-	2.5	
13	10	N-40°-E	5.50	99~118 (104)	111~141 (120)	1~2	
13	11	N-26°-W	1.85	75~80 (77, 5)	96~102 (96)	1.5~2.5	

凡例：()の数字は平均値である。

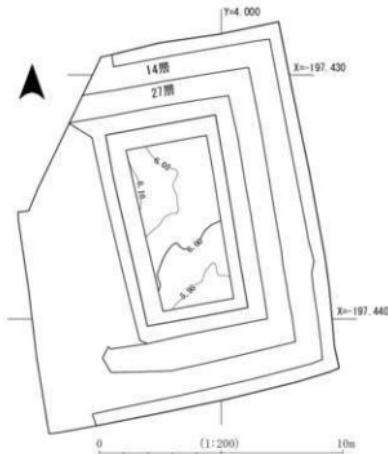
第2表 畦畔計測表

第8節 縄文時代の調査（第19・20図、写真図版5-3・4）

弥生時代の調査終了後、2m程の間層を重機で掘削した後に、縄文時代の遺物包含層の検出に主眼を置いた調査を行った。調査範囲は約 $3.0 \times 6.8\text{m}$ である。この結果、周辺の第104次調査で検出された基本層25a層、25b層と土色や土質が類似する基本層39層、40層を確認した。第104次では基本層25a層、25b層からは縄文時代早期後半の土器や石器が出土しているが、本調査区の基本層39層、40層からは遺構や遺物は検出されなかった。



第19図 40層上面平面図

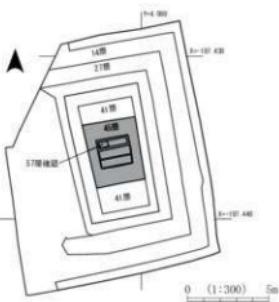


第20図 41層上面平面図

第9節 旧石器時代の調査（第21図、写真図版5-5・6・8）

縄文時代の調査終了後、さらに調査区（約 $3.6\text{m} \times 3.0\text{m}$ ）を狭め、旧石器時代の調査を行った。先行して、重機で調査区南西隅を深堀し、緑色を呈する堆積土の下位で灰オリーブ色の土層（基本層57層）を確認しており、その層が旧石器時代の可能性があると想定し、そこまでの調査を目指とした。

まずは、45層の中間にあたる標高約5.15mまで掘削した（写真図版5-5）。42層からはグラウル化がより顕著となる。過年度の調査で、緑色が強く、硬い層の下位には石器時代の遺物が含まれている可能性が指摘されているので、遺物に注意を払いながら調査を行った。その後、さらに調査区（約 $2.0 \times 1.8\text{m}$ ）を狭くし、腐植土層を確認するために50層まで掘り下げた（写真図版5-6）。47層から50層までは特にしまりが強く、硬い層であった。ここまで掘削し、遺物が出土しなかったので、基本層57層を確認するまで掘り下げた。調査は現地表面下約8.1m、目標としていた基本層57層を確認したが、腐植土層は確認できなかった。



第21図 旧石器時代の調査範囲

第5章 総括

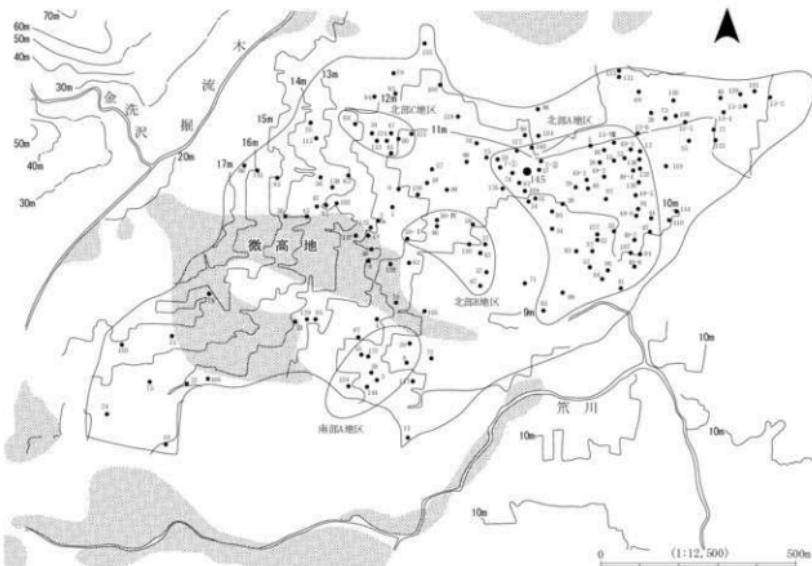
第1節 水田跡の調査成果

1. 周辺調査区との層序対応関係

今回の富沢遺跡145次調査では、基本層5層、6層、7層、9層、12層、13層を水田土壌とする水田跡を検出した。基本層5層から須恵器の細片が1点出土したのみで、他の層からは時期を特定できる遺物は出土しなかった。調査区は遺跡の北部A地区（佐藤甲二：1991）に位置し、各水田跡の時期については、これまでに行われた周辺調査区との基本層序の対応関係から、以下のように考えることができる。

5層水田跡 基本層5層には灰白色火山灰が層中に存在する。隣接する調査区を見ると、第74次調査4層、第81次調査4層などに対応する。これらの層は北部A地区基本土層4a層にあたり、時期は灰白色火山灰降下以降の平安時代と考えられる。なお、平安時代の水田跡の広がりについては、「2. 平安時代の水田跡について」で述べることとする（第23図）。

6層・7層水田跡 基本層6層、7層は層厚が薄く、堆積も部分的であるため、周辺の基本層序との対応関係を提示することは難しい。6層及び7層は灰白色火山灰を含む5層より下位にあることから、時期は同火山灰降下以前の平安時代と考えられる。



第22図 設定地区と調査区位置図

9層水田跡 基本層9層直上には、黒色粘土を主体とし、にぶい黄褐色粘土の薄層が堆積する基本層8層がある。基本層8層は北部A地区基本土層8b層に対応する。基本層9層と対応するのは、第7次調査5層、第17次調査5a層、第74次調査7層などで、北部A地区基本土層9a層にあたり、この地区での鍵層として知られている。時期は弥生時代中期後葉（十三塚式期）と考えられる。この時期の畦畔の検出例が少なく、第7次調査では擬似畦畔が確認されているものの、第17次や第74次調査では水田土壤が確認されているのみで畦畔は見つかっていない。本調査区では畦畔を8条検出したが、水田区画の平面形や規模については不明な点も多かった。この時期の水田跡については、今後の資料の増加を待って改めて検討する必要がある。

12層水田跡 第7次調査7c層、第17次調査7c1層、第74次12層などに対応する。北部A地区基本土層11層にあたり、時期は弥生時代中期中葉（梯形圓式期）と考えられる。この層は広域に広がり、遺存状況も比較的良好なことから、水田跡も多数検出されている（第24図）。

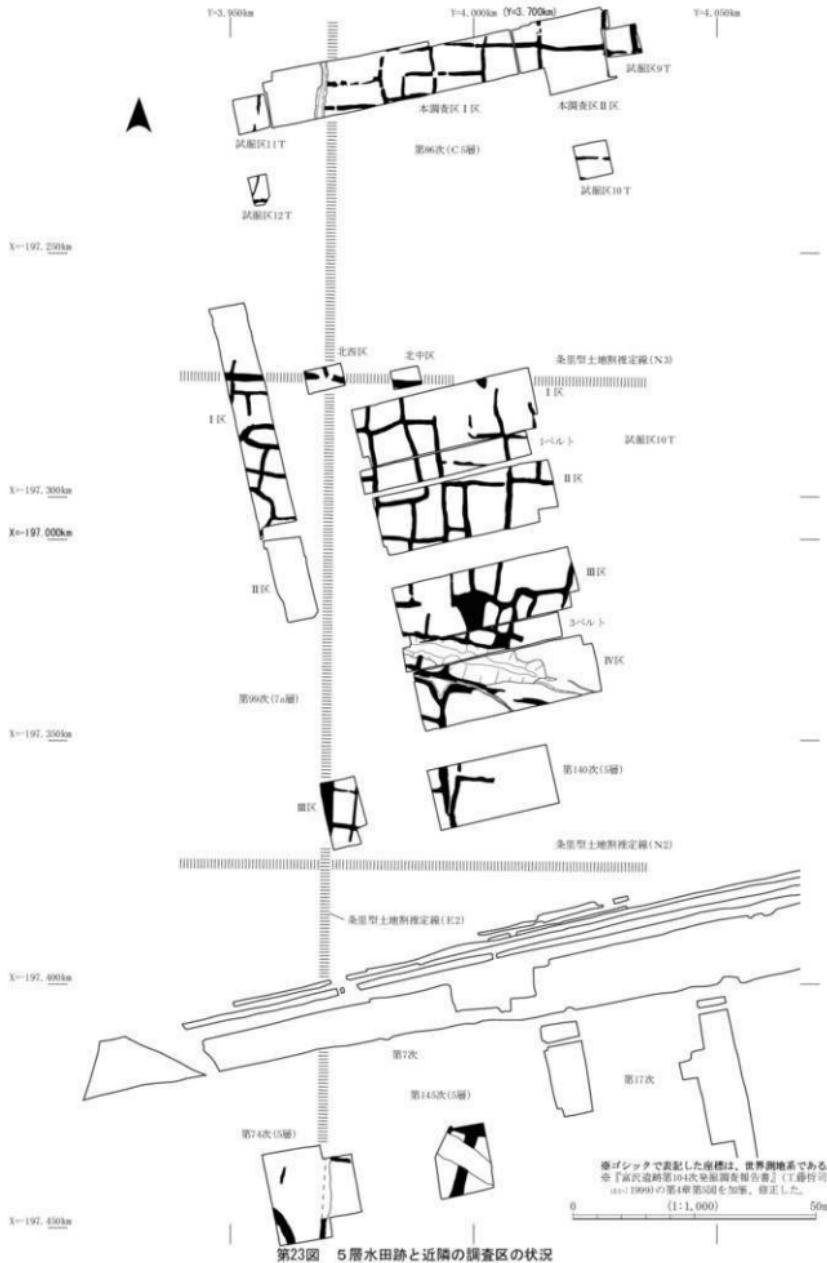
13層水田跡 第7次調査8層、第17次調査7d層、第74次調査13層などに対応し、北部A地区基本土層13層にあたる。この時期の水田跡の検出例が少なく、東側に隣接する第17次調査のB換気口区では畦畔が検出されているものの、年代を決定する遺物は出土していない（吉岡：1989b）。現段階では弥生時代中期中葉以前に位置づけられている。また、13水田跡直下の14層上面では、擬似畦畔と考えられる高まりが確認された。14層は、北部A地区基本土層14層に対応すると考えられる。周辺調査区の様子を見ると、北部A地区基本土層14層は水田土壤としては捉えられておらず、畦畔及び擬似畦畔も検出されていない。

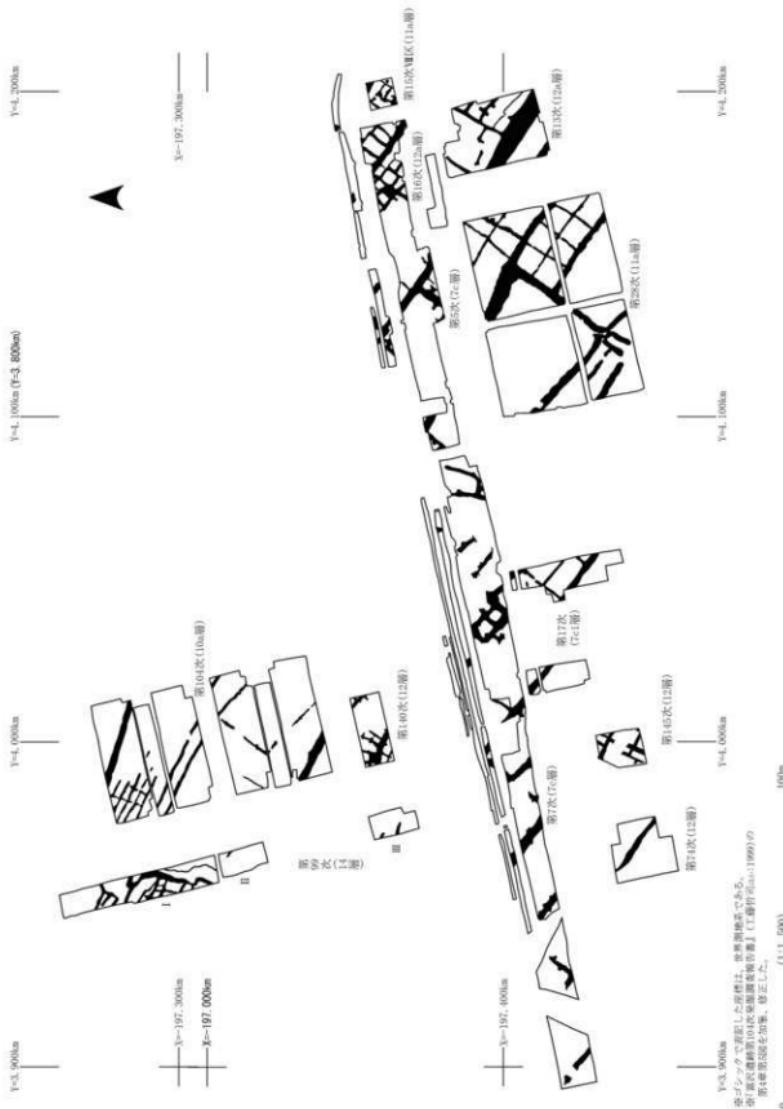
2. 平安時代の水田跡について

第23図は、周辺調査区の平安時代の水田跡を合成したものである。第145次調査以外は、北部A地区基本土層4c層に対応すると考えられる平安時代（灰白色火山灰降下以前）の水田跡である。5層水田跡が灰白色火山灰降下以降まで存続している可能性があり、上述したように6層及び7層水田跡も平安時代と考えられ、5層水田跡と一連のものとして評価するならば、5層水田跡～7層水田跡は灰白色火山灰降下以前から降下以降までの時期幅があり、上限は7世紀末葉～8世紀初頭と理解することができる（斎野：2000）。

平安時代の水田跡の特徴として、条里型土地割の施工が確認されている。これまでの調査成果により、富沢遺跡の条里型土地割が復元されており、検出された基軸畦畔：地割線の交点4点の座標値相互の関係から、方向角：N - 0.45° ~ 0.75° - E、一町の長さ：109mと推定されている（斎野：2000）。第23図を見ると、第99次調査I区、第104次調査北西区・北中区で、条里型地割推定線（N3）と重なる基軸畦畔が検出され、第104次調査北西区、第99次調査III区、第74次調査で条里型地割推定線（E2）と重なる基軸畦畔が検出されている。

本調査区で検出した畦畔は、条里型地割推定線にあたる基軸畦畔ではなかった。ただし、7層から5層にかけて踏襲され続けた畦畔は概ね東西方向を示すこと、また、6層及び7層水田跡で検出した畦畔が南北方向を示すことから、基軸畦畔の方向に平行して小畦畔が造られた可能性がある。





第24図 12層(非都A地区基本土質11層)水田跡と周辺の禁生時代中期中葉の水田跡

第2節 旧石器時代の腐植土層の分布について

本調査では、トレーニングを開いて基本層48～50層、57層程度の2面を旧石器時代の包含層の可能性がある層と想定し、調査を行った。その結果、どちらの層からも腐植土層・埋没林・石器等は出土されなかつた。

ここでは、富沢遺跡における約2万年前の埋没林やそれに相当する腐植土層の分布を確認し、本調査区周辺の腐植土層の状況を考察する。第25図は、旧石器時代の腐植土層の分布を示したもので、第3表は各調査区の腐植土層の特徴を示したものである。これまでに、埋没林や腐植土層は、図で示した20地点で確認されている。その一方で、本調査区同様にトレーニングを開いても腐植土層が確認できなかつた地点が、第7次調査、第17次調査、第38次調査、第140次調査など、17地点がある。

腐植土層は、富沢遺跡の北西から北部に広がり、微高地の西側に沿って分布する傾向がある。腐植土層上面の標高を見ると、最も高い地点は西端の第66次地点が約11.7mで、最も低い地点は南東側の第89次地点が約3.54mとなり、腐植土層の高低は西から東に向かって低くなる。また、富沢遺跡の南側（第39次調査、第55次調査、第59次調査、第72次調査、第97次調査）や富沢遺跡の南東側（第87次調査、第96次調査など）では腐植土層は見つからない傾向がある。

本調査区周辺を見ると、西側に位置する第74次調査、第81次調査、第131次調査では腐植土層が確認されている。それらの標高は、第74次調査区が約5.90m、第81次調査区が約5.94m、第131次調査区が約5.92mとおおむね同じ標高を示す。腐植土層の内容を見ると、第131次調査30層から葉・種子・枝・倒木などが確認されており、第81次調査39層では小枝等の樹木片が少量出土したのみで、第74次調査36層、38層、39層では明瞭な植物化石などは見つかっていない。本調査区を含めた北よりの第7次調査区、第17次調査区、

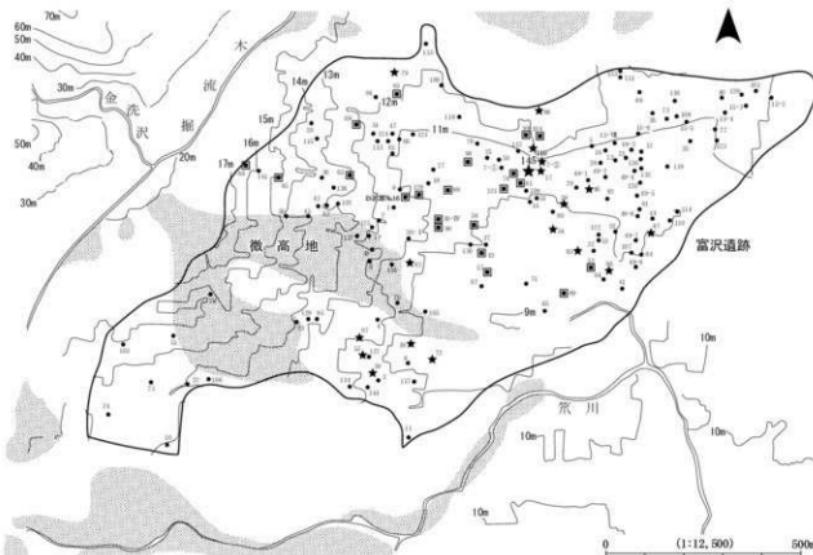


図1『富沢・別崎浦・山口遺跡(3)』第4章 第139図(佐藤甲二:1991)を加筆、修正した。

※2 □は、腐植土層が確認された調査区である。

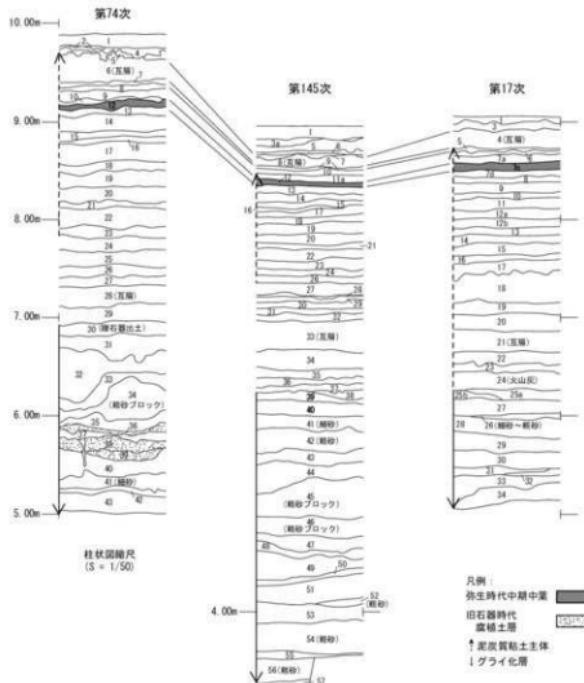
※3 ★は、腐植土層が確認されなかつた調査区である。

第25図 旧石器時代の腐植土層の分布図

第140調査区では腐植土層が確認されていない。また、第99次調査区や第104次調査区では腐植土層が確認されており、それらの標高は、第99次調査区が6.12m、第104次調査区5.95mである。

腐植土層は、これまでの調査から、一つの調査区において複数時期形成されていることもあります、それらの層の対応関係を把握することにはむずかしい面がある。今回の第145次調査区では、腐植土層や樹木、植物化石も検出されていないため、旧石器時代の基本土層については周辺の調査区との対応関係は今後の課題とされる。

なお、本調査区南東側の第52次調査や第89次調査においても腐植土層が確認されているが、その近隣の第38次、第46次、第54次、第83次などの調査区では、腐植土層が確認されていないことからも、本調査区より南東側は腐植土層が形成されにくい地形だった可能性がある（第25図）。



第26図 第145次調査区と近隣調査区の基本層序

測定番号	層位	土質	土色	標高	特徴	参考文献
30-16	17	粘土	暗赤褐色(2, 3R/1-4)	約6.25~8.32m	地盤表面・土井が盛り込まれる。 上部に、以降は燃焼物が混入される。	第29集 (古川:1993)
30	25	粘土	褐オリーブ(2, 5YH7/1)	約6.80~7.30m	地表(10cm)、根木(1本)、葉、葉・茎、種子など、ブジ(薬)。 10cm以上「茎や葉跡・第一次赤茶色・第二次黄褐色分離」。(太田:as-1992)を参照。	第60集 (太田:as-1992)
	26	粘土	黒褐色(10H2/2)	約6.60~7.05m	地表(2cm)、樹木灰(3cm)、枝葉・葉・種子など、ブジ(薬)。	
	26a	樹木質粘土	灰黒褐色(10H8A/2)	約6.25~7.20m	植物遺体(樹木や種子)。	
43	26b	樹木質粘土	褐褐色(2, 5Y5/2)	約6.19~7.24m	植物遺体を含む薄い層。種子何種類か残されている。	第42集 (太田:as-1992)
	21	樹木質粘土	黒褐色(10H3/2)	約6.12~7.20m	植物遺体(樹木や種子)。新規測定の結果、ハシノキ属の種子が8種、トネリコ属の種子が11種、落葉松等の新規の結果、22, 480と475、-400の測定値が報告されている。	
	25	粘土	黄褐色(10H8/2)	約6.47m	植物の腐殖化。	
32⑨	30	シルト質粘土	褐オリーブ(2, 5Y3/2)	約6.40m	上部に植物遺体を含むもの。	第135集 (古川:1993)
	37	粘土	緑褐色(20E/1)	約6.85~9.96m	微弱的な燃焼痕跡。樹木や枝などは未検出。	第122集 (佐藤:as-1993)
	22	樹木質シルト	暗赤褐色(5H2/3)	約6.44~6.79m	植物遺体(種子・枝・葉・種子など)多量。昆虫の目。	
	25a	樹木質シルト	暗褐色(2, 5Y3/2)	約6.37~6.44m	植物遺体(枝・葉・種子など)多量。昆蟲の土虫が多い。	
	32a	樹木質粘土	暗褐色(2, 5YH2/3)	約6.16~6.18m	植物遺体(種子など)多量。昆蟲遺体。	
38	35	樹木質粘土	暗褐色(2, 5YH2/2)	約6.90~6.94m	植物遺体(種子・枝・葉・種子など)多量。昆蟲遺体。	第132集 (佐藤:as-1993)
	37a	樹木質粘土	暗褐色(2, 5H3/3)	約6.48~6.90m	植物遺体(種子・枝・葉・種子など)多量。昆蟲遺体。	
	37b	樹木質粘土	暗褐色(2, 5H1/2)	約6.65m	植物遺体(種子・枝・葉・種子など)多量。昆蟲遺体。 チャッソンヨリの種子(ゴマゴマ)に群生し、多岐山。	
	37c	樹木質粘土	暗赤褐色(2, 5H2/2)	約6.37~7.50m	植物遺体(種子・枝・葉・種子など)多量。昆蟲遺体。	
	21	樹木質粘土	灰黒褐色(10H3/2)	約10.16~10.20m	新規測定(10cm)2種。暗シルトとの互層。 植物遺体(樹木・枝・葉・種子・種子)。	
	33	樹木質粘土	灰褐色(10H8A/2)	約9.94~10.12m	新規測定(10cm)2種。暗シルトとの互層。植物遺体(樹木・葉)など少量。 地表(20cm)、底土(5cm)上の木炭(樹木)のみ。	第132集 (平岡:1992)
	25a	樹木質粘土	暗褐色(2, 5YH/1)	約9.45~10.06m	新規測定(10cm)2種。暗シルトとの互層。 植物遺体(葉)など少量。	
	25b	樹木質粘土	暗褐色(2, 5Y4/2)	約9.78~10.02m	新規測定(10cm)2種。暗シルトとの互層。 植物の木炭、鉄酸化物の沈殿。	
66	34	樹木質粘土	暗褐色(2, 5Y4/1)	約11.7m	植物遺体(木炭・枝・葉・種子・種子)。 (標高)最も高い点。	第142集 (佐藤:as-1993)
	21	粘土	褐オリーブ(2, 5Y3/2)	約9.15~9.25m	植物遺体(枝・葉・葉・種子など)出土。	
68	25a	樹木質粘土	暗褐色(10H2/2)	約9.1~9.3m	植物遺体(樹木・葉・種子など)多量。	第142集 (佐藤:as-1993)
	25b	粘土	暗褐色(2, 5H2/1)	約9.0~9.15m	植物による堆積。樹木。	
	36	粘土	灰(3H4/1)	約9.9m	新規測定土層。	
71	38	粘土	暗褐色(10H2/2)	約10.75m	暗褐色、灰青褐色の樹木質粘土層の互層。	第171集 (平岡:1992)
	39	粘土	灰褐色(10H8A/2)	約10.65m	植物遺体(樹木)含まれる。	
83	39	粘土	灰(3H4/2)	約10.80~10.94m	樹木層上部。樹木片(小枝等)少量出土。	第171集 (佐藤:as-1993)
	24	シルト質粘土	青灰色(2BG5/1)	約11.25m	断続した木炭・植物遺体層。	第47集 (玉十屋:1993)
	25	粘土	灰オリーブ(2, 5Y3/2)	約11.25m	樹木・葉・葉。	
84	15a	粘土またはシルト質粘土	オリーブ(2, 5G15/1)	約15.45m	稍下にやや漂層を帶び、薄い層が不規則に存在する。10cm以下大型植物化石を含む。	第203集 (太田:as-1992)
	15b	粘土	暗褐色(10H2/1)	約15.4m	土中に植物の葉類が頗る。樹木片出土。炭化物片等散在。	
	49	粘土	褐(2, 5Y4/1)	約15.54m	樹木層。全層に分布。	第203集 (太田:as-1992)
93	18a①	粘土	暗褐色(10H3/2)	約17.25m	樹床と柱状の火葬場、樹木(1根)、大型漂層(30cm以上)、樹木片7点を樹種同定し、トウヒ属が4点、カラマツ属が2点認定された。大型植物化石には、多量のトウヒ属パラセニ節とカラマツ属の木炭、トウヒ属の葉裏、トウヒ属とカラマツ属の風化などがある。	第208集 (太田:as-1992)
	18a②	粘土	暗褐色(2, 5Y4/2)	-	樹木の漂層。	
	19	粘土	暗褐色(10H2/2)	約17.08m	樹木炭、針葉樹(イグサツ)の葉、根、枝、根茎等出土。	
96	22	粘土	暗褐色(10H2/2)	約16.0m	樹木炭、根茎等含む。	第221集 (玉十屋:1997)
	24	粘土	暗褐色(10H2/2)	約16.35m	樹木炭、根茎等含む。	
	25	粘土	暗褐色(2, 5Y2/2)	約16.15m	樹木炭、根茎等含む。	
	34	粘土	色なし	-	針葉樹の葉を少數含み、色調が暗褐色である。	
99 (1) 100	35	粘土	暗褐色(2, 5Y3/2)	-	樹木炭、針葉樹(イグサツ)の葉、根、枝、根茎等含む。	第221集 (玉十屋・ 佐藤:as-1997)
	36	粘土	灰褐色(10H8A/2)	-	針葉樹の葉を少數含む。	
	37	砂	明褐色(5G2/1)	-	針葉樹の葉を少數含む。	
99 (10)	38	粘土質シルト	オリーブ(2, 5Y3/1)	約16.00~16.12m	上部に漂層。漂層上に炭化物は含まれるが、種子・植物の植物遺体は含まれない。	第225集 (玉十屋:1997-1999)
	38	シルト	緑褐色(2, 5G15/1)	約16.20~16.57m	木炭・様子を含む。粘土層と砂層の間に見当たる。	
104	39	粘土	暗褐色(10H2/2, 10Y3/2)	約16.95~17.50m	漂層上・漂層、樹木(1根)、根木(1根)、大型漂層(30cm以上)、樹木片7点を樹種同定し、トウヒ属とカラマツ属が認定された。大型植物化石には、多量のトウヒ属パラセニ節とカラマツ属。	第225集 (玉十屋:1997-1999)
	16a	粘土	褐オリーブ(2, 5Y3/2)	西端 7.69~7.96m	植物遺体集中層。樹木(20点以上)内6点を樹種同定。針葉樹のトウヒ属とカラマツ属。植物化石は近年の測定結果。約16.00年場の測定結果も含めている。	
126	16b	粘土	褐オリーブ(2, 5Y3/2)	7.7~7.96m	植物遺体集中層。	第227集 (玉十屋:2004)
	22	粘土・砂	オリーブ(2, 5Y6/1)	約7.5~7.26m	漂層。	
	30	粘土	暗褐色(10H2/2)	約8.4~9.32m	樹木質粘土を含む。植物遺体多量。葉、葉茎、根、枝・茎の樹木の根木。	第276集 (玉十屋:as-2006)
	32	粘土	暗褐色(10H1/2)	約8.56~9.54m	樹木質粘土層を含む。植物遺体多量。葉、葉茎、根、枝・茎の樹木の根木。	

*第26次(30層)は明瞭な底層土層とは言えないが、標高が低い地点での植物遺体出土のため表には記載した。

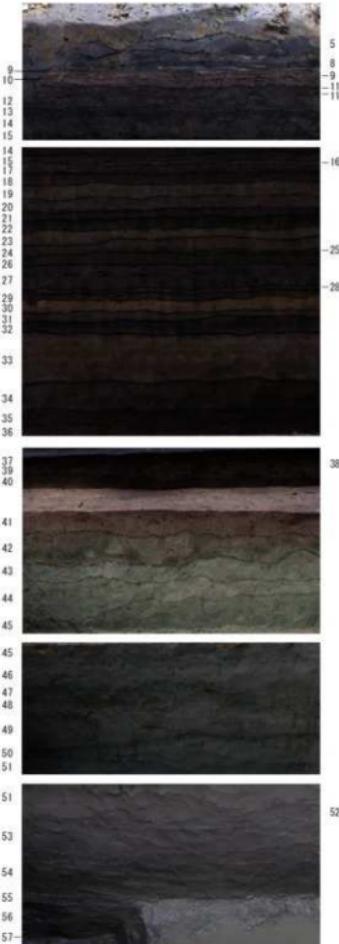
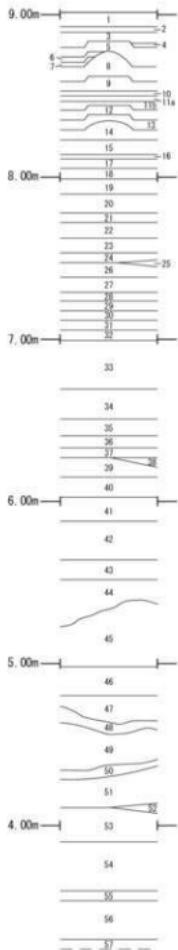
第3表 各調査区における旧石器時代の腐植土層

〈引用・参考文献〉

- 荒井 格 1984 「VI. 富沢水田遺跡」『仙台市高速道路関係遺跡調査概報Ⅳ』仙台市文化財調査報告書 第69集
- 荒井 格 2004 「第5章 植出遺構と出土遺物」『富沢遺跡 - 第126次調査報告書 -』仙台市文化財調査報告書 第273集
- 荒井 格 2004 「富沢遺跡第131次調査報告書」仙台市文化財調査報告書 第276集
- 五十嵐康洋 1993 「第2章 調査結果 第7節 富沢遺跡 第85次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡(5)』仙台市文化財調査報告書 第128集
- 五十嵐康洋 1997 「第2章 調査成果 第5節 富沢遺跡 第98次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡(11)』仙台市文化財調査報告書 第128集
- 五十嵐康洋・佐藤 洋 1997 「第2章 調査成果 第5節 富沢遺跡 第99次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡(11)』仙台市文化財調査報告書 第128集
- 太田昭夫 1989 「第8節 富沢遺跡 第43次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡』仙台市文化財調査報告書 第128集
- 太田昭夫ほか 1991 「富沢遺跡 - 第30次調査報告書I - 第1分冊」仙台市文化財調査報告書 第149集
- 太田昭夫ほか 1992 「富沢遺跡 - 第30次調査報告書II - 第2分冊」仙台市文化財調査報告書 第160集
- 太田昭夫ほか 1995 「富沢・泉崎浦・山口遺跡(8)」仙台市文化財調査報告書 第203集
- 太田昭夫ほか 1996 「第3章 富沢遺跡 第93次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡(9)』仙台市文化財調査報告書 第208集
- 工藤哲司ほか 1984 「富沢水田遺跡」仙台市文化財調査報告書 第67集
- 工藤哲司ほか 1999 「富沢遺跡 - 第104次発掘調査報告書 -」仙台市文化財調査報告書 第235集
- 斎野裕彦 1987 「第7章 検出された遺構と遺物 第1節 遺構の種別と遺物の分類」『富沢 - 仙台市都市計画道路長町・折立線建設に伴う富沢遺跡 第15次発掘調査報告書 -』仙台市文化財調査報告書 第98集
- 斎野裕彦 2000 「富沢遺跡・山口遺跡の条里型土手割の復元とその成立要因」『仙台市富沢遺跡保存館研究報告3』仙台市富沢遺跡保存館
- 斎野裕彦ほか 1987 「富沢 - 仙台市都市計画道路長町・折立線建設に伴う富沢遺跡 第15次発掘調査報告書 -』仙台市文化財調査報告書 第98集
- 佐藤甲二 1990 「第2章 調査結果 第6節 富沢遺跡 第55次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡(2)』仙台市文化財調査報告書 第135集
- 佐藤甲二 1991 「第4章 富沢地区基本層序案・層位対応關係案」『富沢・泉崎浦・山口遺跡(3)』仙台市文化財調査報告書 第152集
- 佐藤甲二 1993 「第2章 調査結果 第3節 富沢遺跡 第81次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡(4)、下ノ内遺跡』仙台市文化財調査報告書 第163集
- 佐藤甲二 1996 「第III章 基本層序の対応関係と擬似咲野Bについて 第1節 基本層序の対応関係」『富沢・泉崎浦・山口遺跡(10)』仙台市文化財調査報告書 第220集
- 佐藤 洋 1991a 「第2章 調査結果 第1節 富沢遺跡 第57次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡(3)』仙台市文化財調査報告書 第152集
- 佐藤 洋 1991b 「第2章 調査結果 第2節 富沢遺跡 第58次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡(3)』仙台市文化財調査報告書 第152集
- 佐藤 洋 1991c 「第2章 調査結果 第12節 富沢遺跡 第66次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡(3)』仙台市文化財調査報告書 第152集
- 佐藤 洋 1991d 「第2章 調査結果 第12節 富沢遺跡 第68次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡(3)』仙台市文化財調査報告書 第152集
- 仙台農耕文化勉強会 1990 「水田路の基礎的理義 - 仙台市における水田路の検出と認定 -」『第3回東日本の水田路を考える会 -資料集-』東日本水田路を考える会
- 中富 洋 1990 「第3節 富沢遺跡 第52次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡(3)』仙台市文化財調査報告書 第135集
- 平間亮輔 1991 「第2章 調査結果 第7節 富沢遺跡 第63次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡(3)』仙台市文化財調査報告書 第152集
- 平間亮輔 1992 「第2章 調査結果 第5節 富沢遺跡 第74次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡(4)、下ノ内遺跡』仙台市文化財調査報告書 第163集
- 松本秀明 1981 「仙台平野の沖積層と後水期における海岸線の変化」『地理学評論』第54巻 第2号
- 吉岡恭平 1989a 「Ⅲ 試掘調査の概要と本調査区の設定」『富沢遺跡・泉崎浦遺跡』仙台市文化財調査報告書 第126集
- 吉岡恭平 1989b 「VI 烏原居地区」『富沢遺跡・泉崎浦遺跡』仙台市文化財調査報告書 第126集
- 我妻 仁 1997 「第2章 調査結果 第1節 富沢遺跡 第95次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡(11)』仙台市文化財調査報告書 第221集

写 真 図 版

基本土层模式图



模式圖縮尺 (5-1/30)

凡例 : 肋脊
—— 据似肋脊B

写真図版 1



1. 調査区南壁断面（北から）



2. 12層水田跡 確認状況（南から）

写真図版2



1. 表土掘削終了状況（南から）



2. SD1 東壁断面（西から）



3. SD1 完掘状況（東から）



4. 5層水田跡 検出状況（東から）



5. 5層畦畔 東壁断面（西から）



6. 5層畦畔 北壁断面（南から）



7. 調査区西壁断面（5層中に灰白色火山灰）（東から）



8. 6層水田跡 検出状況（東から）

写真図版 3



1. 7層水田跡 検出状況（東から）



2. 8層上面 検出状況（東から）



3. 9層水田跡 検出状況（東から）



4. 9層水田跡 検出状況（南から）



5. 12層水田跡 検出状況（南東から）



6. 12層水田跡 検出状況（南から）



7. 13層水田跡 検出状況（南東から）



8. 13層水田跡 検出状況（南から）

写真図版 4



1. 14層上面 検出状況（南から）



2. 重機による開削掘削状況（東から）



3. 40層上面 検出状況（南から）



4. 41層上面 検出状況（南から）



5. 45層中間まで掘削終了状況（南から）



6. 50層までの掘削終了状況（南から）



7. 調査区全景（南から）



8. 調査区北壁断面（旧石器時代）（南から）

写真図版 5

報告書抄録

ふりがな	とみざわいせき						
書名	富沢遺跡						
副書名	第145次発掘調査報告書						
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第382集						
編著者名	工藤信一郎、水野一夫、石垣義則						
編集機関	仙台市教育委員会						
所在地	〒980-8671 宮城県仙台市青葉区二日町1丁目1 電話 022-214-8839						
発行年月日	2011年3月18日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				
富沢遺跡 第145次	仙台市太白区 長町南3丁目 1-10	041009	01369	38° 13' 26"	140° 52' 32"	20100823～ 20101102	178 (仮称)仙台市南部発達 相談支援センター建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
富沢遺跡 第145次	水田跡 包含地	旧石器時代 ～平安時代	水田跡(6時期) 溝状遺構(1条)		須恵器 土師器		
要 約	<p>富沢遺跡は名取川と広瀬川によって形成された沖積平野の後背湿地に立地する。調査の結果、基本層5層、6層、7層、9層、12層、13層を水田土壤とする6時期の水田跡と、基本層3層上面で溝跡1条を検出した。周辺調査区の基本層序との対応関係から水田跡の時期は、5層水田跡は平安時代（灰白色火山灰降下以降）、6層・7層水田跡は平安時代（灰白色火山灰降下以前）、9層水田跡は弥生時代中期後葉、12層水田跡は弥生時代中期中葉、13層水田跡は弥生時代中期中葉以前と考えられる。</p> <p>縄文時代の調査では、縄文時代早期に相当すると考えられる基本層39層、40層を確認したが、遺物は出土しなかった。</p> <p>旧石器時代の調査では、現地表面下約8.1m、標高3.24mまで基本層序を確認したものの腐植土層は認められず、遺物も出土しなかった。</p>						

仙台市文化財調査報告書第382集

富沢遺跡

— 第145次発掘調査報告書 —

2011年3月

発 行 仙台市教育委員会

宮城県仙台市青葉区二日町1丁目1
文化財課 022-214-8839

印 刷 株式会社 ライフ

千葉県成田市東和田595
0476-24-1564